

令和4年度  
富山大学におけるFD活動報告書

富 山 大 学

教育・学生支援機構教育推進センター

## 目次

あいさつ	1
1. 第1回全学FD202「自己省察を促し、主体的学習へ繋げる学修ポートフォリオ」実施報告	
開催趣旨	4
当日プログラム	5
参加者内訳	6
当日資料	7
参加者アンケート設問・回答結果まとめ	35
2. 第2回全学FD2022「アフターコロナの大学教育のニューノーマル：教育の質の転換をめざして」実施報告	
開催趣旨	48
当日プログラム	49
参加者内訳	51
当日資料	52
参加者アンケート設問・回答結果まとめ	62
3. 各部局におけるFD活動報告	
人文学部	70
教育学部	72
経済学部	74
理学部	76
工学部	77
医学部医学科	79
医学部看護学科	81
薬学部	83
芸術文化学部	85
都市デザイン学部	86
教養教育院	87
4. 全学におけるアンケート結果	
DP達成度調査・卒業時調査結果	92
5. 全部局FD活動一覧及び参加状況	
令和4年度FD参加状況	109
令和4年度FD活動実施状況・実施予定一覧	110
6. 各種資料	115

## 令和4年度富山大学におけるFD活動報告書

### あいさつ

令和4年度富山大学におけるFD活動報告書を発刊するにあたり、ご協力いただいた全学FD・教育評価専門会議委員の皆様へ深く感謝いたします。今年度も各学系において活発にFD活動が取り組まれており、大学の教育力向上に大きな貢献があったものと認識しております。関係者の皆様へ感謝申し上げます。

今年度開催した全学FDはこの時期に必要な重要テーマを取り上げました。第1回全学FDのテーマは「自己省察を促し、主体的学習へ繋げる学修ポートフォリオの導入」として、本年度より試験的導入が検討され、令和6年度より本格運用開始が予定されている学修ポートフォリオについて、導入事例を紹介して全学の教員へポートフォリオについて理解を深めるために実施されました。講演後は各学系からの意見をいただき、活発に質疑応答が行われました。第2回全学FDでは「アフターコロナの大学教育のニューノーマル：教育の質の転換をめざして」というテーマを掲げて、インストラクショナルデザインの第一人者である熊本大学の鈴木克明教授（教授システム学研究センター教授システム学専攻）を講師としてお招きして、本学の研修会では初の試みとなる反転授業型の研修会を開催しました。参加者にはあらかじめ鈴木先生の講演ビデオや資料を学んで質問を提出してもらい、研修会当日は鈴木先生から質問に対する回答とその背景となる考え方を説明してもらいました。ご講演内容は高等教育の本質に迫るものでした。この形式での研修会に対して主催者側の経験不足のためか、周知の仕方が足りなかったためか、参加者は思いのほか少なく、ご講演内容の意義深さを考えると大変に残念な思いをしました。参加されなかった方にもご講演の内容を理解していただけるように、以下に特に興味深いと感じた話題を2つだけピックアップしてご紹介します。興味を持たれた方は第2回全学FDの資料をご覧ください。

#### (1) 非同期型教育の活用

同期型は対面授業やリアルタイムオンライン授業をいい、非同期型はオンデマンド型あるいは授業時間外に行う自律型の学習を指します。コロナ禍で作り上げた非同期型の教材や経験は貴重で、コロナが収束して対面型に戻っても、非同期型を組み合わせることで活用することによって、質の高い教育が実現できます。これに関連して、参考資料として「ID（インストラクショナルデザイン）の目的（効果・効率・魅力）」をあげていただきました。授業を計画する際には、学習者が目標とする知識・スキルの修得（効果）を短時間・省エネモードで達成（効率）、もっと学びたいという気持ちにさせる（魅力）、この3つを目指すことが大事です。コロナ禍で授業外学修課題が増え、学生も教員も時間が足りないという声が聞かれましたが、それは効率を配慮していな

いといえます。一般的に学習効果を重視すると学習時間が増える傾向にありますが、非同期型を組み合わせることによって学修効率を高めることができます。また、教育熱心な教員ほど多くの内容を授業に盛り込もうとする傾向がありますが、教えすぎずにもっと学びたい気持ちにさせる授業計画を作成し、授業の先へ自主的に勉強を促すことが高等教育の本質ではないでしょうか。

## (2) 知識詰め込み型から理解・応用・創造レベルの教育への方策

「知識重視（知識詰め込み型）の教育は必要だが、それだけでは不十分で、応用や創造レベルを目指さなければならない。どうしたら自分の責任で学びたいことを学ぶという姿勢を身に付けさせることができるのか」という質問に対して、参考資料「逆向き設計、パラシュート型勉強法」をあげて回答していただきました。通常の授業設計では基礎から順に積み上げるやり方ですが、この方式では学生は先が見えないために先へ向かうモチベーションを上げにくいという欠点があります。逆向き設計とは応用から基礎へと向かう授業設計で、実務レベルの応用問題から始めるやり方です。目指すべきゴールを示してから、そこに向かうために必要な理解・知識は何かを考えて学んでゆくというやり方です。下から上に向かって階段を上るのではなく、高い位置からパラシュートで着地点に向かうほうが全体を俯瞰でき、学修者の立場に立った勉強ができるという考え方です。

本報告書には各学部のFDのテーマ、取り組み事例、そこで得られた成果や今後の課題を掲載しています。全学的に共有できるテーマをいくつかご紹介します。4つの学部で学生のサポートに関するテーマが取り上げられました。経済学部「コミュニケーションを苦手とする学生への理解について」、理学部「発達障がいのある学生へのサポートについて」、芸術文化学部「メンタルヘルスの基礎と支援のポイント」、都市デザイン学部「授業等で欠席が続いている学生のケア等について」です。学生の精神的不調へのケアは重要な課題です。また、本学は障害のある学生の入学を積極的に推進しています。障がいのある学生へはアクセシビリティコミュニケーション支援室が中心となって支援を行っていますが、支援には学生、教員、支援室の三者が連携して取り組んでいく必要があります。経済学部では、初年次と3年次に行っているPROGテストの結果報告がありました。PROGテストとは知識を活用して問題解決する力（リテラシー）と経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）の2つの観点でジェネリックスキルを測定するものです。本学のディプロマポリシーとも深く関連しており、他の学部でも参考になる取り組みではないでしょうか。各学部で取り組んでいる活動を学部間で情報共有し、更なる教育改善の活性化に向けてほしいと願います。

全学FD・教育評価専門会議議長  
谷井 一郎

# 1. 第1回全学FD2022

「自己省察を促し、主体的学修へ  
繋げる学修ポートフォリオの導入」

実施報告

## 全学FD2022「自己省察を促し、主体的学習へ繋げる学修ポートフォリオ」開催趣旨

全学FD・教育評価専門会議議長 教養教育院 谷井一郎

富山大学では、令和4年度より学修ポートフォリオの導入を計画しています。そこで本研修会は、「ポートフォリオとは何、目的は、内容は」といった疑問に対して、ポートフォリオの基本や小中高の事例と他大学の事例を紹介します。

本来ポートフォリオとは、建築家やデザイナーが自分の作品を紹介するために用いた「作品集」のことを指します。転じて、各自の成長を残した記録集を表す言葉としても用いられるようになりました。これが教育現場では、目標達成のために学生が何を体験して何を理解・発見し、どのような学習の成果が得られたかを、学生自身が整理、保存したものを指すようになりました。

現在ポートフォリオを導入している大学が増えてきております。その理由は、学生に自律的学習者となることを求めているからです。学修ポートフォリオによって自身の学修や活動を評価し、省察することによって学生の主体性を高めていくことができると考えられます。中教審大学分科会による教学マネジメント指針(平成2年)に学修ポートフォリオについて次のように述べられています。「学生の学修履歴・活動履歴を体系的に蓄積・収集し、大学のみならず一人一人の学生が様々な形で自らが身に付けた資質・能力のエビデンスとして活用できるようにするためには、学修ポートフォリオの利用等が効果的に機能するものと考えられる。」また、「学生が自ら目標を明確に意識しつつ主体的に学修に取り組み、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出していく“自律的な学修者”となることが求められている。」とあります。

本研修会は、学修ポートフォリオの導入事例を学び、本学における学修ポートフォリオのあり方について学部との意見交換を行い、各学部において学修ポートフォリオの導入を検討する際の参考にしていただくために企画しました。

2022年6月1日

## 第1回全学FD2022 プログラム

日時：6月1日（水）15：00～16：30

開催形態：Microsoft Teams を利用したオンライン開催

テーマ：自己省察を促し、主体的学習へ繋げるための学修ポートフォリオ

- (1) 開催あいさつおよび日程説明 (15:00～15:02)  
谷井一郎（全学FD・教育専門会議議長）
- (2) 講演「自己の成長を知るためのポートフォリオー小中高の事例を中心にー」 (15:02～15:22)  
成瀬喜則（大学院教職実践開発研究科教授）  
原野克憲（富山大学教育学部附属小学校長）
- (3) 他大学のポートフォリオの事例紹介 (15:22～15:42)  
谷井一郎（全学FD・教育専門会議議長）
- (4) 本学の学修ポートフォリオ機能の紹介 (15:42～15:57)  
学務部学務課担当者
- (5) 質疑応答 (15:57～16:12)
- (6) 各学部との意見交換 (16:12～16:27)  
ー入力項目や教員からのフィードバックについてー  
各学部代表者
- (7) 閉会あいさつ (16:27～16:30)  
磯部 祐子（教育推進センター長）

## 【当日参加者内訳】

教員	
役員	1
人文科学系	11
教育学系	18
社会科学系	8
芸術文化学系	16
教養教育学系	12
理学系	2
都市デザイン学系	22
工学系	16
医学系	10
薬学・和漢系	9
教育研究推進系	9
その他	1
小計	135

職員	19
----	----

学生	2
----	---

合計	156
----	-----

## 【オンデマンド参加者内訳】

教員	
人文科学系	1
教育学系	1
社会科学系	1
芸術文化学系	1
教養教育学系	1
理学系	0
都市デザイン学系	1
工学系	0
医学系	9
薬学・和漢系	7
教育研究推進系	4
その他	1
小計	27

職員	2
----	---

合計	29
----	----

総計	185
----	-----



# 自己の成長を知るためのポートフォリオ －小中高の事例を中心に－

学術研究部 教育学系  
(大学院教職実践開発研究科長) 成瀬喜則

附属小学校長 原野克憲

1

## ポートフォリオの意義 (学習者・教師の面から)

- 学習者が自分の学びを深めるための学習履歴や学習記録の活用  
鳥井・上館 (山口) (2020)
- 校務情報を学習記録データ (学習成果物等の授業・学習の記録) と有効につなげ、学びを可視化



学習者の自己分析・改善・成長  
教師の学習指導・生徒指導等の質向上や学級・学校運営の改善  
(文科省 2020)

2

## eポートフォリオ

- PDCA の習慣を身につけ、学修エビデンスを基にして自己評価、他者評価による振り返り
- 目的は学修意欲の促進
  
- 入学時自己診断シート、学生面談カルテ、今週の活動とトップニュース、自学自習時間推移、学修到達度レポート、学期末活動報告書

藤本(2021)

3

## 学びのプロセスに対する振り返り

- eポートフォリオは、学習プロセスにおいて収集できる学習エビデンスを継続的に蓄積した電子データ
- 最終のプロダクトとして学習成果に対する振り返りは容易だが、学習プロセスに対する振り返りは難しい

### ストーリー・ポートフォリオ

自分自身の経験や成長の度合いをテーマにして、自身の学びの軌跡をストーリー立てて、動画編集ソフト等を用いてまとめる

(大目・森本ら 2018)

4

## いろいろな振り返り

- 「振り返り」を振り返ることでメタ認知力の向上
- 「書く振り返り」から「話し合う振り返り」へ
- 振り返りによって自己調整力の向上

5

- 能力別に自己評価
- 項目毎に具体例を挙げさせて
- ルーブリック評価の必要性

定期的に（月1回、学期に1回、...）生徒が記入する

能力	説明	具体的な場面・行動
（自己）分析能力	自分の姿を客観的に分析して、それを良い方向に伸ばそうとする力	・ HRの時間で、将来の職業についてグループ内で話し合った。
情報収集能力	将来の進路に関して必要な資料や、いろいろな人からの情報を集める力	・ 資料室で〇〇の会社について、どのような仕事をするのか調べて、発表した。 ・ レポートにまとめて提出した。
計画実行能力	将来の進路実現に向けて計画的に学習したり活動したりする力	・ 〇〇の会社で必要になる資格について調べて勉強している。

1年間の振り返り

- 適性の有無（自己肯定感）
- 将来（進路意識）
- 社会への貢献について
- 実現可能性について

広島県教育委員会（2022）より整理

6

## e-ポートフォリオ（学習者利用の面から）

- ・ふりかえり：成長（学び）を確認
- ・学習成果物：多種多様な成果の蓄積
- ・自己の学習目標：目標の設定
- ・実習評価：客観的に自己分析
- ・指導者からのフィードバック：コミュニケーション

鹿児島大学(2022)より

7

## 県内高校でのeポートフォリオから

- ・学校生活には、勉強以外にも気づきや学びが多くある。
- ・「ポートフォリオ」
  - 日々の学習の気づきや部活動のこと
  - テストの振り返り
  - 進路の悩み
  - 将来の夢
  - 学校行事、ボランティア活動をさまざまな形で記録
- ・ポートフォリオには「自主的な振り返り」と「先生からの配信をきっかけとした振り返り」

Classi Corp. Classiポートフォリオより

8

### 活動記録を保存しアルバム化

学習の振り返り用、課外活動の目標、日々の振り返り用  
目標を意識しながらその活動を保存するフォルダ  
アルバムごとに目標を設定して使用  
活動記録、振り返り記録の再整理ができるように

### スペース

ホームルームクラス、授業、探究学習、委員会、部活動など 相互評価  
公開された活動記録の確認

### 生徒同士の相互評価

活動を生徒相互で評価：できるだけ良い点を多く見つけよう  
生徒自身が自己分析し深い学び：他者の尊重、メタ認知的に（俯瞰力の向上）

### 自らの学びをデジタルストーリー

3年間の学びをひとつの画面に：活動を通して学びを整理できる  
日々の活動を振り返り、生徒自身が学びを整理

Classi Corp. Classiポートフォリオより

9

## ポートフォリオ作成に際して

- 日頃の活動記録を登録できるような体制（常に利用できる、利用しないとイケないように）
- 学習状況、成績はもちろん様々な活動、提出物など自分の歩み（特に成長度合い）を振り返ることができるように
- 振り返るためには観点（ルーブリック評価やパフォーマンス評価）をよりどころに
- 評価観点だけでなく、それを裏付ける活動や事実を意識
- 教員との交流が見える場面と個人だけの記録の場面

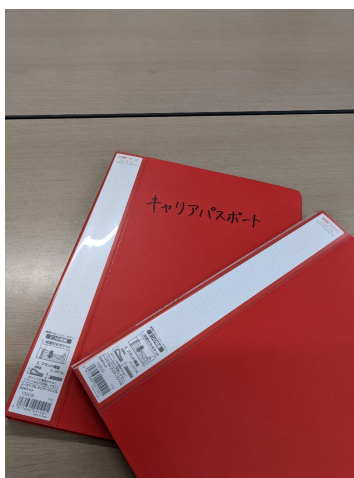
10

## 参考文献

- 鳥井・上館（山口）（2020）我が国におけるポートフォリオ活用に関する研究課題の考察,日本教育工学会論文誌 44(Suppl.), 201-204
- 藤本(2021) SOJOポートフォリオシステムの活用によるPDCAサイクル意識の醸成について, 崇城大学 46, 21-35
- 文部科学省(2020) 教育の情報化に関する手引-追補版
- 国立教育政策研究所（2018） キャリアパスポートって何だろう  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/143/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/10/03/1409581\\_013\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/143/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2018/10/03/1409581_013_2.pdf) (2022.05.25参照)
- 広島県教育委員会 私のキャリアノート～夢のスケッチブック～  
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/06senior-2nd-career-sketchbook-sketch20top.html>  
(2022.05.25参照)
- 藤本(2021) SOJOポートフォリオシステムの活用によるPDCAサイクル意識の醸成について,崇城大学 46, 21-35
- 大目・森本ら(2018), ストーリー・ポートフォリオ作成が学習プロセスの振り返りに与える影響,日本教育工学会論文誌 41(Suppl.), 193-196
- 鹿児島大学 <https://eps.kufm.kagoshima-u.ac.jp/eps/> (2022.05.25参照)
- 砺波高等学校（2019）令和元年度新たな学び創造事業研究報告書  
<https://www.pref.toyama.jp/documents/10076/01359065.pdf> (2022.05.25参照)
- 文部科学省(2022) StuDX Style, <https://www.mext.go.jp/studxstyle/> (2022.05.25参照)
- Classi Corp., Classiポートフォリオ <https://classi.jp/> (2022.05.25参照)

11

## 小・中学校におけるポートフォリオ (キャリアパスポートを中心に)



12

## 1 「キャリア・パスポート」とは

文部科学省では、以下のように定義しています。

「キャリア・パスポート」とは、児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。

富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」（富山県教育委員会：令和元年11月）より

「キャリア・パスポート」の目的と定義（省内インナー会議による）より

13

## 1 「キャリア・パスポート」とは

なお、その記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない。

富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」（富山県教育委員会：令和元年11月）より

「キャリア・パスポート」の目的と定義（省内インナー会議による）より

14

平成29年改訂の小・中学校学習指導要領に関するQ&A（特別活動）より

問5 学級活動(3)で活用する「児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等」とは、どのようなものですか

(答)

学級活動(3)の指導に当たっては、振り返って気付いたことや考えたことなどを、児童生徒が記述して蓄積する、いわゆるポートフォリオ的な教材のようなものを活用することを指して「児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等」（いわゆるキャリア・パスポート）を活用することとしています。

特別活動や各教科等における学習の過程に関することはもとより、学校や家庭における日々の生活や、地域における様々な活動なども含めて、教師の適切な指導の下、児童生徒自らが記録と蓄積を行っていく教材です。こうした教材等については、小学校から高等学校まで、その後の進路も含め、学校段階を超えて活用できるようなものとなるよう、各地域の実情や各学校や学級における創意工夫を生かした形での活用が期待されます。

※学級活動2の(3)とは、「一人一人のキャリア形成と自己実現」

15

問5 学級活動(3)で活用する「児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等」とは、どのようなものですか

指導に当たっては、キャリア教育の趣旨や学級活動全体の目標に照らし、書いたり蓄積したりする活動に偏重した内容の取扱いにならないようにすること、プライバシーや個人情報保護に関して適切な配慮を行うことが求められます。なお、文部科学省において平成31年3月29日付けで「『キャリア・パスポート』例示資料等について」が発出、公開されています。この例示資料等を参考としつつ、各地域・学校の実情に応じた教材等の導入・活用が求められます。

(参考)

平成29年改訂小学校学習指導要領解説（特別活動編）第3章第1節

平成29年改訂中学校学習指導要領解説（特別活動編）第3章第1節

平成31年3月29日付初等中等教育局児童生徒課事務連絡「キャリア・パスポート」例示資料等について

16



## 2 キャリアパスポートの意義

子供自身が

各教科等の学習、  
特別活動での学  
び、体験したこ  
との  
**振り返り**

気付いたこと、  
考えたこと等  
の  
**蓄積**

活動をまとめる、  
つなぎ合わせる  
**活動をする**

期待する姿

このことにより

- ・ 目標をもって自律的に生活できるようになる
- ・ 各教科等を学ぶ意義についての自覚を深める
- ・ 学ぶ意欲が高まる

(令和4年度 富山県教育指導の重点より)

17

児童生徒が学びのつながりを実感するツールとしての  
キャリアパスポート

児童生徒にとっては

- ・ 学習内容や資質・能力がどう積み重ねられてきたかを確認する
- ・ 入学から現在に至るまで、どのように成長してきたかを確認する

教師にとっては

児童生徒が

どのような指導の積み重ねにより発達してきたかを知る

ツールとして活用し、  
発達段階に応じた系統的なキャリア教育を充実させる。

(令和4年度 富山県教育指導の重点より)

18

### 3 「キャリア・パスポート」の作成

- ① 児童生徒が日常の授業等の振り返りでシートを書き、蓄積する。
  - ・シートは学校でこれまで作成したもの
  - ・文部科学省や県教育委員会の例示資料を基に作成したもの
- ② 児童生徒が年度始めや各学期末、年度末の学級活動等の時間に、これまで書いたシートの中から次の学年や校種に引き継ぐためのシートを選んだり振り返ってシートにまとめたりする。
- ③ 児童生徒が選んだシートやまとめたシートをファイルに綴じて、次の学年や校種に引き継ぐ。  
(A4判両面5枚程度、最終的には12年間分のシートが蓄積)

富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」(富山県教育委員会：令和元年11月)より

19

### 5 自己評価シートとレイダーチャート

児童生徒が、社会的・職業的自立を図るために必要と考える四つの力に関わって、一人一人が自らの成長を実感することができるように、年度始めと年度末に自己評価をするシートを作成する。レイダーチャートに表すことで、変化が分かりやすくなる。

(富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」(富山県教育委員会：令和元年11月)より)

20

## A小学校のキャリアパスポート

5年生 4月当初「今の自分について考えてみよう」

四つの力について  
自己評価(4段階)

人間関係形成社会・形成能力

自己理解・自己管理能力

キャリアプランニング能力

課題対応能力

来年の3月には、どんな自分  
になっていたいか。

目当て; 分からないことを、あきらめずに知ろうとする自分

なりたい自分に近づくためにがんばりたいこと  
→「自分が興味をもつことができるものを探す」

富山大学教育学部附属小学校  
キャリアパスポート自己評価シートより

21

## 「なりたい自分」や「活動の学び」を記録・蓄積するシート

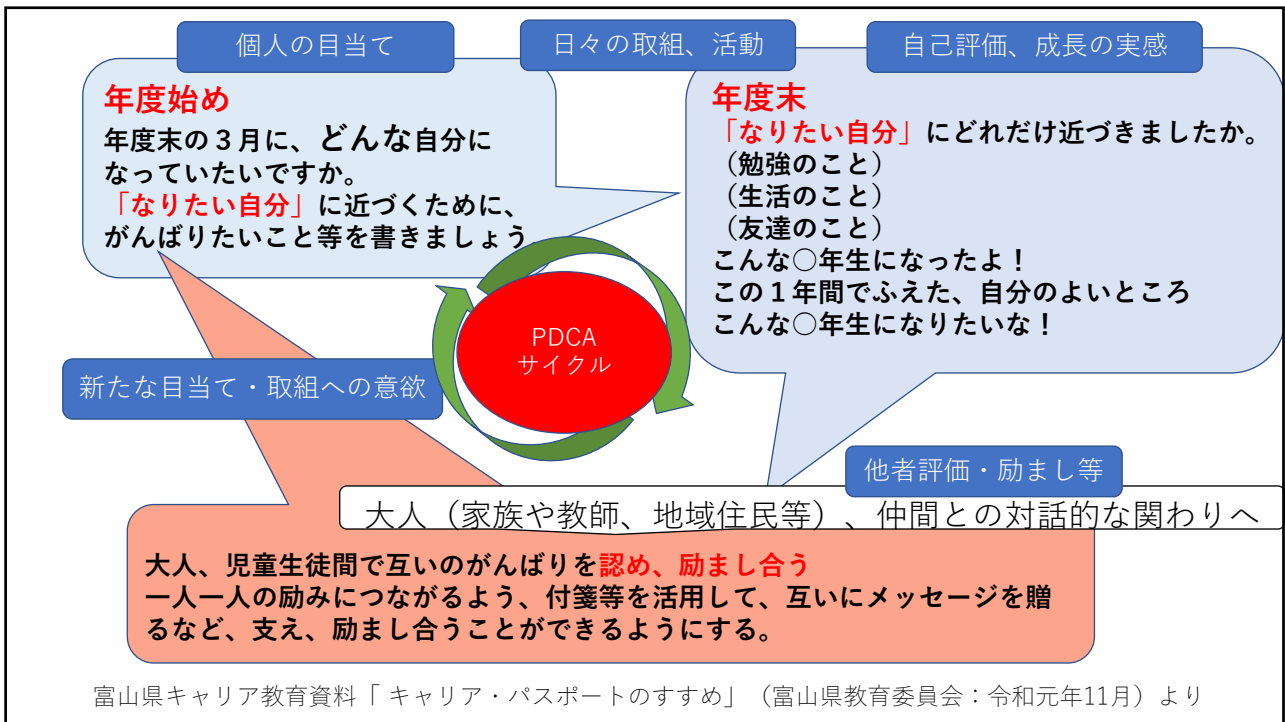
年度始めや各学期末に、

- ・一人一人が「なりたい自分」について記録する。
- ・どれだけ近づくことができたかを振り返る。

このようにすることで、「なりたい自分」を描く児童生徒が増えることを期待する。(次頁参照)

富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」(富山県教育委員会:令和元年11月より)

22



23

## 5年生 年度末 「5年生を振り返ろう」

**4月当初から、「分からないことを、あきらめず知ろうとする自分」になろうと頑張ってきた。**

5年生をふり返ろう

○「なりたい自分」に近づくためにがんばったことやできるようになったことを書きましょ

**なりたい自分に近づくためにがんばったこと、できるようになったこと**

- ・学習は計画的に進められるようになった。
- ・計算塾との両立ができるようになった。
- ・分からないことは家族に聞いた。
- ・テスト勉強を頑張った。

○今の自分について考えてみましょう。

① ほとんどできていない ② あまりできていない ③ まあまあできている ④ かなりできている  
 点を線でつないで4月と比べてみましょう。形が大きくなりましたか。

○自分の長所や短所を確かめようとしている。  
 ○好きなことや得意なことでも、自分から進んで取り組む。

○友達や家の人の話を聞くとき、その人の考えや気持ちを分かろうとする。  
 ○自分の考えや気持ちを、相手に分かりやすく伝えようと考えている。

○自分の夢や目標に向かって、一生懸命頑張っている。

**欄外のメモ書き**  
**未来へ一歩ふみ出す**  
**～思いやりとあきらめない心～**

**四つの力を自己評価（4段階で）**  
**課題対応能力が、3から4へ**

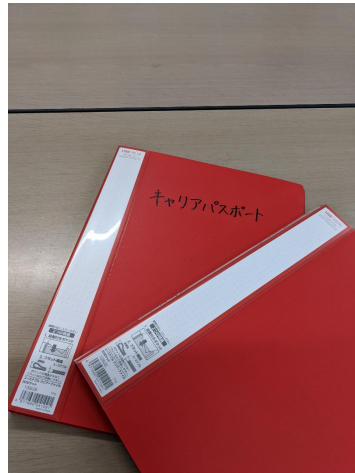
**こんな5年生になったよ（成長したところは？）**

**この1年間で、面倒くさがらずに、思いやりをもてる人になったよ。**

富山大学教育学部附属小学校  
 キャリアパスポート自己評価シートより

24

## B中学校のキャリアパスポート



25

## 中学1年生 前期の振り返りシート（左ページ）

前0期の活動を振り返ろう！

1. おもな活動について

係・役職名など (部活動・委員会など) 自分自身でがんばったこと・改善すべき点などに記入していない場合は、斜線を引く (役職についてなくてもがんばったこと等を、具体的に書く)

学級活動	学級長、副学級長、書記、委員、係長、その他
生徒会活動	会長、副会長、書記、委員、係長、その他
学校行事	運動会、文化祭、体育祭、その他
部活動	部員、部長、副部長、書記、委員、係長、その他
その他	ボランティア、コンクール、コンテスト、その他

### 前期の活動についての振り返り

- ・学級活動、生徒会活動、学校行事、部活動、その他、学習について
- ・係、役職名等の記入
- ・自分自身で頑張ったこと、改善すべき点などの記述

富山大学教育学部附属中学校  
キャリアパスポート自己評価シートより

26

# 「自分の将来をイメージしよう」 (中学2年生) 令和3年11月30日

第2学年キャリア学習 2021年11月30日(水)

## 自分の将来をイメージしよう

1. 自分の将来をイメージする。①～③の欄に書いてみましょう。

① ③ ① ③	② ②	④ ④
① ③ ① ③	② ②	④ ④
① ③ ① ③	② ②	④ ④

2. 中学生の「今」、身につけていきたい「基礎的・汎用的能力」を具体化してみよう。(※4領域を詳細に身に付けなければならないわけではない)

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
---------------	-------------	--------	--------------

**自分の将来をイメージする (表の右から記入)**  
 ①なりたと思っている職業等 ②なるために必要な能力  
 ③行くべき校種・学科

**中学生の「今」、身につけていきたい「基礎的・汎用的能力」**  
 「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」(四つの力)

富山大学教育学部附属中学校  
キャリアパスポート自己評価シートより

- ・子供の成長を願い、日々タイムリーに、一つの区切り、節目に、指導と評価の一体化に心がける。
- ・子供、教師、保護者は、累積したものやことを効果的に生かす。

## 第1回 富山大学全学FD2022

テーマ：「自己省察を促し、主体的学習へ繋げる学修ポートフォリオの導入」

### 他大学の事例紹介

富山大学教養教育院 谷井一郎

### 学修ポートフォリオとは

本来ポートフォリオとは、建築家やデザイナーが自分の作品を紹介するために用いた「作品集」のことをさします。転じて、各自の成長を残した記録集をさす言葉としても用いられるようになりました。

学修ポートフォリオは、目標達成のために学生が何を経験して何を理解・発見し、どのような学習の成果が得られたかを、学生自身が整理、保存したものです。

# ポートフォリオの重要性

## 文部科学省の指針より

学生の学修履歴・活動履歴を体系的に蓄積・収集し、大学のみならず一人一人の学生が様々な形で**自らが身に付けた資質・能力のエビデンスとして活用できる**ようにするためには、学修ポートフォリオの利用等が効果的に機能するものと考えられる。

（「教学マネジメント指針」中央教育審議会大学分科会，令和2年1月）

# ポートフォリオの重要性

## 文部科学省の指針より

学生が自ら目標を明確に意識しつつ主体的に学修に取り組み、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出していく**自律的な学修者となる**ことが求められている。

（「教学マネジメント指針」中央教育審議会大学分科会，令和2年1月）



## ポートフォリオ活用の目的

- 省察のツールとして
- 評価のツールとして

## ポートフォリオ活用の目的

### ➤ 省察のツールとして

- ✓ 学生の自己省察を促す：何ができて、何ができないか、これから何をすべきか
- ✓ これまでの学修・活動を振り返ることによって、学習を深化させ、将来のキャリアデザインに活かす

## ポートフォリオ活用の目的

### ➤ 評価のツールとして

- ✓ 学生が自らの学修成果を評価し、成長のプロセスを自覚できる：形成的評価のツール
- ✓ 学生が就職の際に大学で得た学習成果をエビデンスとして活用できる
- ✓ 教員が学生の到達度を見て、具体的、建設的なフィードバックを行える

## ポートフォリオの内容の分類と事例

### ➤ コンピテンシーベース

学位の質保証, DP達成度の可視化

### ➤ フログ型

学生が学修や経験・出会い・学びなどの活動を記録  
振り返りを通して、キャリアを考える

### ➤ カルテ型

要支援学生の早期把握, キャリア支援など学生との  
面談資料として使う

### ➤ 統合型

# 鳥取大学(医学部医学科)の事例

## 評価と省察, コンピテンシーベース

### DP3-2: コミュニケーション能力

具体的なコンピテンシー (能力)

- 1 患者や患者家族とコミュニケーションを通じて、良好な関係を築くことができる。
- 2 医療チームのメンバーとコミュニケーションを通じて、連携を図ることができる。
- 3 聴覚障害者などの障害者と手話等でコミュニケーションをとって、円滑な診療をサポートすることができる。
- 4 地域フィールドの中で、地域住民、行政関係者、医療関係者らとコミュニケーションをとり、社会性を身につけ良好な関係を築くことができる。
- 5 安全かつ有効に情報ネットワークを活用してコミュニケーションを取ったり、情報を収集したりできる。

### 自己評価の入力画面

1

自己評価を選択してください。

- 1 まったく達成していない
- 2 あまり達成していない
- 3 少し達成している
- 4 まあまあ達成している
- 5 かなり達成している

(鳥取大学eポートフォリオシステムより)

### あなたの回答 (例)

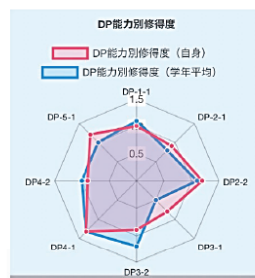
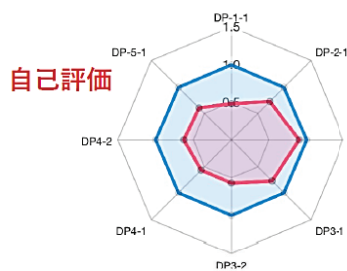
### 2. Reflecting 学修結果の分析・省察

回答者: 学生 302 送信完了: 2021年 10月 4日(月曜日) 10:40

### DP3-2: コミュニケーション能力

具体的なコンピテンシー (能力)

- 1 患者や患者家族とコミュニケーションを通じて、良好な関係を築くことができる。
- 2 医療チームのメンバーとコミュニケーションを通じて、連携を図ることができる。
- 3 聴覚障害者などの障害者と手話等でコミュニケーションをとって、円滑な診療をサポートすることができる。
- 4 地域フィールドの中で、地域住民、行政関係者、医療関係者らとコミュニケーションをとり、社会性を身につけ良好な関係を築くことができる。
- 5 安全かつ有効に情報ネットワークを活用してコミュニケーションを取ったり、情報を収集したりできる。



1

よく学べた点 (自己の強み) を記入してください。 **よく学べた点の記載**

早期体験ボランティアでは、病院内の見学を通して、医師、看護師、薬剤師等の役割や連携について学ぶことができた。脳梗塞の患者さんのリハビリテーションを見学し、その時の身体状態を医師、看護師に報告しリハビリテーションの方法の改善に繋げることができ、円滑な診療サポートに役立った。

ヒューマンコミュニケーションでは、保育園体験から幼児とのコミュニケーションについて実践的に学ぶことができた。担当した幼児と一緒に金メダルを作成し、最終日に私へプレゼントしてくれたことは心に残っている。この体験から小児科への関心も高まり、小児科とコミュニケーションに関する書籍を1冊ずつ自己学習した。

2

\* できなかった点を記入してください。

**できなかった点の記載**

基礎手話の授業では、手話を覚えることが難しく、スムーズに実践することができなかった。

3

\* よく学べた点の成果となるリンクを記述してください。 **よく学べた点の成果となるリンクを選択**

・早期体験ボランティアレポート課題 [https://drive.google.com/file/d/1A9mkXu003NGlgXt4NHGJGz2D4Q\\_V/view?usp=sharing](https://drive.google.com/file/d/1A9mkXu003NGlgXt4NHGJGz2D4Q_V/view?usp=sharing)

・ヒューマンコミュニケーション グループ応用課題 [https://drive.google.com/file/d/1A9mkXu08i3l03NGlgXt4NHGJGz2D4Q\\_V/view](https://drive.google.com/file/d/1A9mkXu08i3l03NGlgXt4NHGJGz2D4Q_V/view)

7

(鳥取大学eポートフォリオシステムより)

# (参考資料) DP能力別修得度計算方法

1) 学生が履修した全授業科目に対して、単位数、成績情報、当該科目の各DP能力の配点(統合配点表)を求める。

評価	評価点	比率	備考
A	90~100	評価点/60	評価点に基づく比率
B	80~89		
C	70~79		
D	60~69		
S	合格	評価点(80)/60	Sは、学務支援システムにおいて評価点「80」が入力されている。 Nは、学務支援システムにおいて評価点「80」が入力されている。 ※比率はこのままで良いのか要検討 →ひとまずこのままとする。 ※算出する授業科目として含めるのか要検討 →現状では含めるものとする。
N	認定		
F	不可/不合格	0.0	Fは、学務支援システムにおいて評価点「0~59」が入力されている。
E	不履修	0.0	Eは、学務支援システムにおいて評価点「0」が入力されている。

各授業科目のDP能力配点表 例

科目コード	科目名	DP能力1	DP能力2	DP能力3	DP能力4	DP能力5	合計	区分	備考		
		-1 基本的な 知識(技 術・態度)	-1 人間力と 倫理観	-2 患者中心 の医療の 実務	-1 論理的思 考力・判 断力	-2 コミュニ ケーション 能力				-1 知的探求 心と創造 力	-2 国際的視 点で考え る能力
M3110300	医療英語 I	0	0	2	0	0	2	6	0	10 医学科・外国語	必修
M3110400	医療英語 II	0	0	2	0	0	2	6	0	10 医学科・外国語	必修

2) 1) の結果を基に、学生ごとに以下に示す DP 能力別修得度を算出する (i は各教育プログラムにおける DP 能力数を示す)。

$$\text{DP 能力別合計スコア (i)} = \sum_{j=1}^{\text{全履修科目数}} [\text{授業科目の単位数 (j)}] \times [\text{成績評価に基づく比率 (j)}] \times [\text{各 DP 能力の配点 (i, j)}]$$

$$\text{DP 能力別基準スコア (i)} = \sum_{j=1}^{\text{全履修科目数}} [\text{授業科目の単位数 (j)}] \times [\text{各 DP 能力の配点 (i, j)}]$$

$$\text{学生の DP 能力別修得度 (i)} = \frac{\text{DP 能力別合計スコア (i)}}{\text{DP 能力別基準スコア (i)}}$$

例：Aさんが医療英語 I (2単位) で80点をとった場合

医療英語におけるDP2-2計算例

DP能力別合計スコア = 2単位 × 比率1.33 (80 ÷ 60) × DP能力配点2 = 5.32

DP能力別基準スコア = 2単位 × DP能力配点2 = 4.00

DP能力別修得度 = 5.32 ÷ 4.00 = 1.33

8

(鳥取大学eポートフォリオシステムより)

## 筑波大学の事例

### 省察, フログ型

#### 01 CARIOとは?

つくばキャリアポートフォリオ (愛称: CARIO) は日々の経験から皆さんのキャリアを拓いていくためのワークシートです。

学生時代の経験・出会い・学びの積み重ねが筑波大におけるあなたのキャリアです。

記録を残し、振り返ることを通じてあなた自身のキャリアを築きあげていきましょう。

**CARIO**を使って、自分の歩んできた  
道のり(キャリア)をもとに  
将来(キャリア)を考えることができる。

学生時代の様々な  
経験・出会い・学び  
(=筑波大学における  
キャリア)



CARIOを使って  
記録を残し  
振り返る



将来(キャリア)を  
考えることができる

- 自分を客観的に振り返ることができる
- 目標設定  
目標の再検討・再構築ができる

イベントや学生生活を振り返るシート、自分自身を見つめるためのシート、将来のこと・夢を考えるためのシート等、全部で4タイプ50種類程度のワークシート

目的別ワークシート

T: 学生生活の軌跡(記録)に関するワークシートのグループ

T-10: 大学のイベントからの気づき	
T-11 「新入生オリエンテーション」メモ	
T-12 「春季スポーツ・デーふりかえり」シート	
T-13 「やどかり祭ふりかえり」シート	
T-14 「夏休みの思い出」シート	
T-15 「学園祭ふりかえり」シート	
T-16 「秋季スポーツ・デーふりかえり」シート	
T-17 「春休みの思い出」シート	
T-1z 「その他のイベントふりかえり」シート	
T-20: 活動経験からの気づき	
T-21 「アルバイト経験ふりかえり」シート	★
T-22 「ボランティア経験ふりかえり」シート	★
T-23 「部活動・サークル活動ふりかえり」シート	★
T-24 「インターシップふりかえり」シート	★
T-2z 「その他の活動経験ふりかえり」シート	★
T-30: 授業からの気づき	
T-31 「履修科目ごとの総括ふりかえり」シート	
T-3z 「その日の授業で気づいたこと」シート	
T-40: 読書からの気づき	
T-4z 「読書ふりかえり」シート	
T-50: 日常生活からの気づき	
T-51 「日常生活での発見」シート	
T-52 「日常生活での悩み」メモ	
T-5z 「日常生活で最近思うこと(雑感)」シート	
T-60: 一定期間の気持ちの動き(移り変わり)	
T-61 「気持ちの動きふりかえり」シート(PART1: ライフライン・シート)	★
T-62 「気持ちの動きふりかえり」シート(PART2: イベント・シート)	★
T-70: 国際交流・海外体験からの気づき	
T-71 「国際交流&海外体験」プランニングシート	
T-72 「国際交流&海外体験」ふりかえりシート	

記入して  
振り返ることを通して、  
整理されたり  
新たに気づくことがあります。  
気軽に使ってみましょう!

(つくばキャリアポートフォリオより)

C: 学生生活や進路選択に役立てるための調べたことに関するワークシートのグループ

C-10: 知り合いのオトナからの話	
C-11 「気になる先輩観察」メモ	
C-12 「身近な社会人インタビュー」メモ	
C-1z 「人からの情報収集・整理」シート	
C-20: 自分の専攻(専門領域)に関するイメージ	
C-21 「自分の専攻(専門領域)をイメージする」シート	
C-22 「他者からみた自分の専攻(専門領域)イメージ整理」シート	
C-23 「筑波での学び(専門領域)をイメージする」シート	
C-30: 仕事についての情報収集	
C-31 「身近な仕事調査整理」シート	★
C-32 「興味のある仕事調査整理」シート	★
C-3z 「その他の仕事調査整理」シート	★
P: 自分自身について考えたことに関するワークシートのグループ	
P-10: 日頃から感じている自分の強みや弱み	
P-11 「自分の強みと弱み整理」シート	★
P-12 「身近な人々の強みと弱み整理」シート	
P-13 「自分の強みと弱みの多面的整理」シート	★
P-20: 人生のなかで感じている大事にしていること	
P-21 「大事にしていること、ゆずれないことを整理する」シート	★

自分の強みや弱みて?  
大切にしていることって?  
このシートで振り返ってみましょう。

F: 目標・目的・夢に関するワークシートのグループ

F-10: 大学に入った目的	
F-11 「大学に入った目的宣言」シート	
F-12 「大学での目的バージョンアップ(追加・変更・削除)宣言」シート	
F-13 「大学に入った目的宣言」シート(NEWバージョンシート)	
F-14 「大学に入った目的実現・達成状況確認」シート	
F-1z 「大学に入った目的を考えていて気づいたこと」シート	
F-20: いろいろな夢をコトバに	
F-21 「夢?夢・・・夢~夢!」ノート	
F-22 「夢の実現に向けたアクションプラン」シート	
F-30: 就職活動・公務員・教員採用試験	
F-31 エントリーシート対策シート	★
F-32 就職活動対策シート	★
F-40: 大学院進学	
F-41 研究テーマの整理シート	★

★がついているシートは、  
就職活動におすすめ!

シートの種類はたくさんありますが、自分の使いたいシートを選んで、活用しましょう!

(つくばキャリアポートフォリオより)

## [F-22] 夢の実現に向けたアクションプランシート

・[F-11] で作成した目的や、夢や目標を実現するために必要なことを考えてみましょう。いつまでに、何を、どのようにやるのか、整理することで一歩踏み出すきっかけになります。どんな小さな一歩でもかまいません。今できることから少し先のことまで、思いつくものを洗い出してみましょう。

「夢の実現に向けたアクションプラン」シート 作成年月日: 年 月 日

このシートは、夢を実現するために必要なことを考えたり、実現や達成状況を確認したりするためのシートです。どんな小さな一歩でも構いません。今できることから少し先のことまで、色々と思いつくものを洗い出してみましょう。

やりたいこと	何を	いつまでに	どのように	達成状況 (後日記入)
①				
②				
③				
④				
⑤				
⑥				

夏休み等の長期休みの  
アクションプランを  
考えるときに使うことも  
オススメです！

### 「夢の実現に向けたアクションプラン」シート 作成年月日: 年 月 日

**(例)** このシートは、夢を実現するために必要なことを考えたり、実現や達成状況を確認したりするためのシートです。どんな小さな一歩でも構いません。今できることから少し先のことまで、色々と思いつくものを洗い出してみましょう。

やりたいこと	何を	いつまでに	どのように	達成状況 (後日記入)
① 留学に 行く	① お金をためる (目標30万!)  ② 英語力をあ げる	① 2023年 夏  ② 2023年 夏	① パイトを始める (毎月6万円稼ぐ!) ② 授業の予復習をやる、 留学生と交流し、英語を 使う機会を作る	
②				
③				
④				
⑤				
⑥				

(つくばキャリアポートフォリオより)

## [T-61] 気持ちの動きふりかえりシート

・横軸に期間 (STARTとEND) を記入して、その期間での気持ちの状況を1本の線で表してみましょう。書き終わったら、線の変化のきっかけとなった出来事を余白にメモしていきましょう。自分の気持ちを可視化することで自分に向き合い、自分を知るきっかけになります。新たな気づきや発見があるかもしれません。

Career Portfolio Worksheet T-61

「気持ちの動きふりかえり」シート (PART1: ライフラインシート) 作成年月日: 年 月 日

つくりかた

- 横軸の期間 (STARTとEND) を記入します (最低でも年度に1回、できるだけ3ヵ月に1回、気がむいたら1ヵ月に1回は、作成してみましょう)。
- このシートは、設定した期間のなかでの、気持ちの状態を、一本の線 (ライフライン) で表すことによって、今までの自分の気持ち面での変化をふりかえるためのシートです。
- 楽しかった、面白かった、幸せだった時代は、ゼロの横軸よりも上の範囲でライフラインを描きます。
- 苦しかった、悲しかった、辛かった時代は、ゼロ以下の範囲でライフラインを描きます。
- そんなに厳密に書く必要はありませんが、ライフラインが上向きに変化したり、下向きに変化したりする動きやきっかけを思い出しながら、描きます。
- ライフラインを描きながら気づいたことや、ラインの変化のきっかけとなった出来事を余白にメモして、後で見るときに、思い出せるように、補足していきます。

**(例)**

START ( )

START (高3の3月) END (大学1年の6月)

(つくばキャリアポートフォリオより)

# 山口大学(医学部・医学科)の事例

## 省察, カルテ型

学生用

1.現状を選択してください【必須】

1)大学生活は充実している	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
2)今まで立てた目標は達成できている	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
3)修学に積極的に取り組んでいる	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
4)他者と円滑にコミュニケーションをとり、協調、共働できている	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
5)社会的責任、良心と規範に従って行動している	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない

2.これまで(前回から)の大学生活で成長した・頑張ったことを記入してください(学業・部活動・役職など)【必須】

test

3.大学生活の中で気になっていることがあれば記入してください【必須】

test

4.これからの大学生活で特に力を入れていきたいこと・目標を記入してください(学業・学業外など)【必須】

(学業)

test

(学業外)

test

“担任制”と連動しており、担任講座の教員が、ポートフォリオ・シートを確認し、面談等を行います。

教員用

1.現状を選択してください【必須】

1)大学生活は充実している	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
2)今まで立てた目標は達成できている	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
3)修学に積極的に取り組んでいる	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
4)他者と円滑にコミュニケーションをとり、協調、共働できている	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない
5)社会的責任、良心と規範に従って行動している	<input checked="" type="radio"/> 4.そう思う <input type="radio"/> 3.ややそう思う <input type="radio"/> 2.あまりそう思わない <input type="radio"/> 1.そう思わない

2.これまで(前回から)の大学生活で成長した・頑張ったことを記入してください(学業・部活動・役職など)【必須】

test

3.大学生活の中で気になっていることがあれば記入してください

test

4.これからの大学生活で特に力を入れていきたいこと・目標を記入してください(学業・学業外など)【必須】

(学業)

test

(学業外)

test

教員記入

記入日	2020年2月20日
教員の名前	■■■■

I.担任講座(教員)チェックボックス

ここにチェックを入れたことで、面談を行ったこととなります

II.担任講座(教員)自由記載欄

7. “確認画面”をクリックしてください。

戻る >

6. 当該学生が今年度に記入したポートフォリオ・シートの確認をしてください。

7. チェックした(eYUMEにログインした)教員名が自動転記されています。

7. チェックし、自由記載欄に記入をお願いします(面談の備忘録等としてご利用ください)。

# 高知大学の事例

## 評価と省察, 総合型

The screenshot shows the 'e-Portfolio' interface for a student named 'Student Taro'. The interface is divided into several sections:

- 1. Profile:** Student name (Taro), ID (S09G5R96P), and other information (3rd year).
- 2. Academic Performance:** A dropdown menu to select the semester/year (e.g., 2017 1st semester).
- 3. Course Schedule:** A table showing the schedule for the 2017 1st semester, including subjects, days, and times.
- 4. Goals:** A section for setting goals, such as 'Graduation goal' (e.g., improve English communication skills) and '2017 1st semester academic goal' (e.g., attend all classes).
- 5. Academic Performance:** A section for recording academic performance, including '2017 1st semester reflection' and '2017 end-of-year reflection'.
- 6. Student Life Record:** A section for recording student life activities, including 'Standard Course Activities' (e.g., tests) and 'Department Activities' (e.g., soccer).
- 7. Advisor/Teacher:** Information about the advisor/teacher, including name (Taro) and contact details.

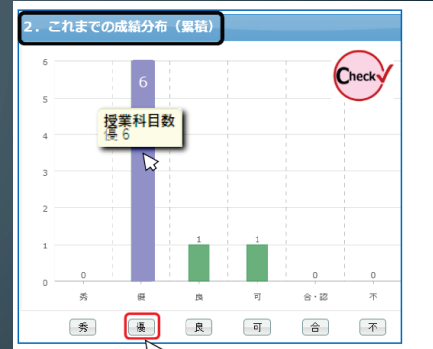
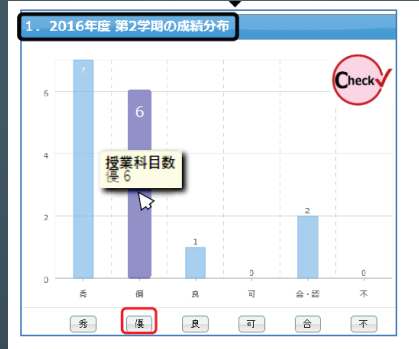
トップページでは卒業時までの目標や学期ごとの振り返りを記入できる

項目	表示内容
①履修状況	現在までの履修科目一覧や各科目の情報が確認できます。また、履修科目の成績評価分布・平均点・標準偏差の確認ができます。科目ごとに行った授業の振り返りアンケートの結果の閲覧も可能です。 詳細は P.8 を参照
②成績分布	自分の現在までの成績分布や GPA の推移・修得単位数(累計)等が確認できます。 詳細は P.12 を参照
③学生生活記録	在学中の準正課活動、部活動・サークル活動、ボランティア活動など、いろいろな活動が記録できます。自分だけの非公開ページ「マイストーリー」に思い出の写真をアップするなどして、マイポートフォリオを作りましょう！ 詳細は P.14 を参照
④進路・資格	「進路」では、入学時～卒業まで、「自分の卒業後の進路希望」を残そう。TOEIC 等の外国語能力試験・大学生基礎力レポート・セルフアセスメントシート等の結果の確認ができます。 詳細は P.17 を参照 「資格」では、在学中に取得した資格取得情報を記録でき、ファイル添付も可能で就職活動や進学時に便利！ 詳細は P.19 を参照
⑤目標・振り返り入力	自分が学生生活でやりたいこと、やるべきこと、卒業時に達成していたい目標や定期的な学生生活の振り返り等を記録することができます。 詳細は P.23 を参照

(高知大学eポートフォリオより)



# 学習成果の可視化



(高知大学eポートフォリオより)

# 授業の振り返り

(4) 「授業の振り返り」タブを選択すると入力画面が表示されます。自己評価項目に沿って回答を行い、最後に「登録」ボタンを選択します。

本授業科目の情報一覧

教員名	教員太郎
時間割	月・2限
出席率	-
シラバス	シラバス
成績評価 (GP)	秀
成績情報	成績分布

履修授業科目：テスト大学生生活入門

授業の振り返り | グラフ集計

この授業の到達目標を参照しながら、あなたのこの授業での学修を振り返ってみましょう。下記の振り返り項目の設問に回答して下さい。

■ 授業科目目標

目標

■ 授業担当教員からのメッセージ

メッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージメッセージ

■ 学修自己評価項目

1) 設問1設問1設問1設問1設問1設問1設問1

ラジオ1ラジオ1ラジオ1ラジオ1ラジオ1

ラジオ2ラジオ2

ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3ラジオ3

登録

(高知大学eポートフォリオより)

# アドバイザー教員によるメッセージ履歴の確認

The screenshot displays the 'e-Portfolio' interface for a student named '太郎' (Taro). The top navigation bar includes 'ホーム' (Home) and 'ログアウト' (Logout). The main content area is divided into several sections:

- プロフィール (Profile):** Student name '太郎', ID 'S09G5R96P', and 'その他 (3年生)' (Others (3rd year)).
- 表示年度・学期 (Display Year/Period):** A dropdown menu showing '2016年度 第2学期', '2016年度 第1学期', '2015年度 第2学期', and '2015年度 第1学期'.
- 卒業時に達成していたい目標 (Goals to be achieved at graduation):** A text box containing '英語でのコミュニケーション能力を磨いて、卒業後は外資系企業に就職し、海外でも仕' (Polish communication skills in English, graduate and work for a multinational company, work overseas).
- 2017年度 第1学期の学修目標 (Learning goals for the 1st semester of 2017):** A text box containing '時間にルーズなところがあるので、履修している授業に毎回遅刻せずに出席する。' (Since I am often late with time, I will attend every class on time).
- 2017年度 第1学期の振り返り (Reflection for the 1st semester of 2017):** A text box containing '成績発表がありました。成績や学生生活を振り返ってみましょう。半期のテスト入力' (The grades were announced. Let's reflect on the grades and student life. Enter the test results for the semester).
- 2017年度末の総合振り返り (Overall reflection at the end of 2017):** A text box containing '年度末の目標 (テスト入力)' (Goals at the end of the year (test input)).
- アドバイザー教員によるメッセージ履歴 (Message history from advisor teacher):** A list of messages from '太郎' (Taro) to 'アドバイザー教員' (Advisor teacher). The messages are dated '2017/06/02' and include details like '校内からメッセージのテスト送信 (学内)' (Test message sent from campus) and '学外からテスト送信。添付ファイルあり。' (Test message sent from outside campus. Attachment file included).

A red circle with the number '1' is placed over the message history section. At the bottom, there is a table with columns for '2017年度 第1学期', '授業担当教員', '開講日時', 'シラバス', '講義資料', '資料URL', '授業科目の', '成績評価 (GP)', '成績評価 (評点)', '単位数', '出席', '授業科目', '授業科目', '成績評価分布', and 'ファイル'.

(高知大学eポートフォリオより)

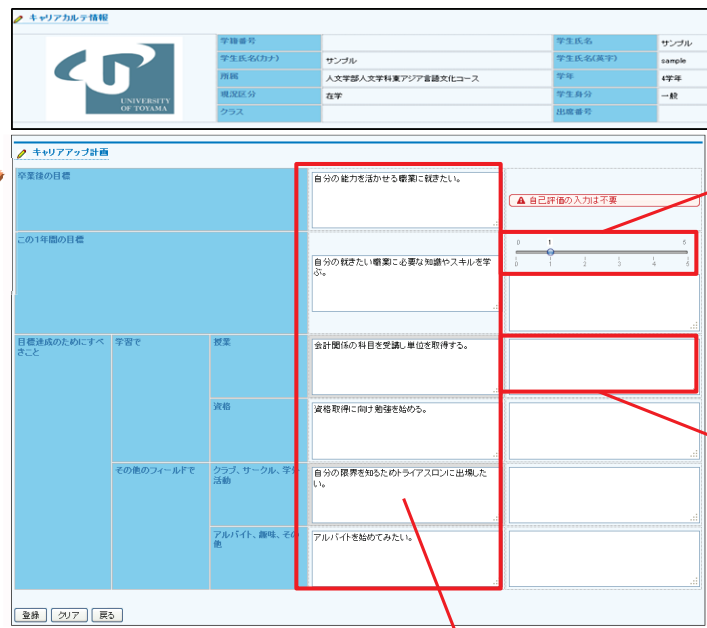
## 学修ポートフォリオは

- 各大学の学部・学科のDPに応じて、多様性がある
- 導入に当たっては各学部・学科において導入目的や必要性を明確にして、内容を整える
- 教員や学生に意義を伝達し、学部・学科内でコンセンサスを得ることが重要

キャリアカルテ (目標設定・自己評価)



目標設定・自己評価



評価形式に「達成度」が設定されている場合にのみ表示されます。事務側システムで設定された最大値までを選択できます。

評価形式に「コメント」が設定されている場合にのみ表示されます。事務側システムで設定された入力文字数まで入力できます。

事務側システムで設定された入力文字数まで入力できます。

キャリアカルテ (ワークシート コメント・アドバイス)



ワークシート情報



日々の活動記録を登録します。

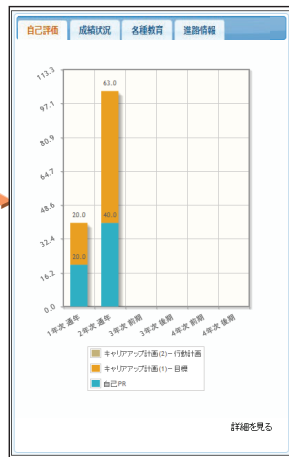
コメント・アドバイス



指導教員等からのコメントやアドバイスを登録します。

キャリアカルテ (自己評価・成績・各種教育プログラム・就職情報)

自己評価 (グラフ)



各種教育

各種教育プログラム	修得年度	単位数
教育プログラム1	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
教育プログラム2	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
教育プログラム3	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
教育プログラム4	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
教育プログラム5	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
SDGs	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
目標	2019	0.0
	2020	0.0
	2021	0.0
プログラム名	教育プログラム1	
タイトル	応用英語1	
修得済日付	2022年5月24日 10時50分35秒	

進路情報

**1 進路希望情報**

希望進路区分: 就職 (企業) その他 (その他)

希望企業: 01145200 : 日鉄ソリューションズ (株)

希望業種: その他のサービス業 学術・開発研究機関

希望職種: サービス職

希望勤務地域: 九州

進路希望入力へ

**2 就職活動情報**

就職活動先: 日鉄ソリューションズ(株) [自己開拓/内定 (合格)] 未登録企業 [自己開拓/] 雷印種苗(株) [受験せず]

就職活動入力へ

**3 進路決定情報**

決定進路区分: その他 (一時的な仕事に就いた者)

決定先:

内定(決定)日:

就職(進学)予定日: 2020年4月

満足度:

進路決定入力へ

就職支援機能で登録された情報を参照します。

各種教育プログラムの修得単位数を表示します。

キャリアカルテ (自己評価・成績・各種教育プログラム・就職情報)

成績状況

単位修得状況や積算能力表を表示します。

修得年度	単位数
2019	38.0
2020	45.0
2021	34.0
合計	117.0

単位修得状況照会へ  
積算能力表へ

# 富山大学第1回全学FD2022 参加者アンケート

全学FD・教育評価専門会議

本日は、富山大学第1回全学FD2022に御出席いただき、ありがとうございます。今後の企画の一層の充実を図るため、アンケートに御協力をお願いいたします。

1. 属性を選んでください。

- ア. 教員                      イ. 職員                      ウ. 非常勤講師                      エ. 学生  
オ. その他 (                      )

2. 所属を選んでください。(※1で「職員」を選んだ場合は回答不要)

(1で「教員」を選んだ場合)

- ア. 人文科学系      イ. 教育学系      ウ. 社会科学系      エ. 芸術文化学系  
オ. 教養教育学系      カ. 理学系      キ. 都市デザイン学系      ク. 工学系  
ケ. 医学系              コ. 薬学・和漢系      サ. 教育研究推進系  
シ. 非常勤講師 (教科をご記入ください \_\_\_\_\_ )

(1で「学生」を選んだ場合)

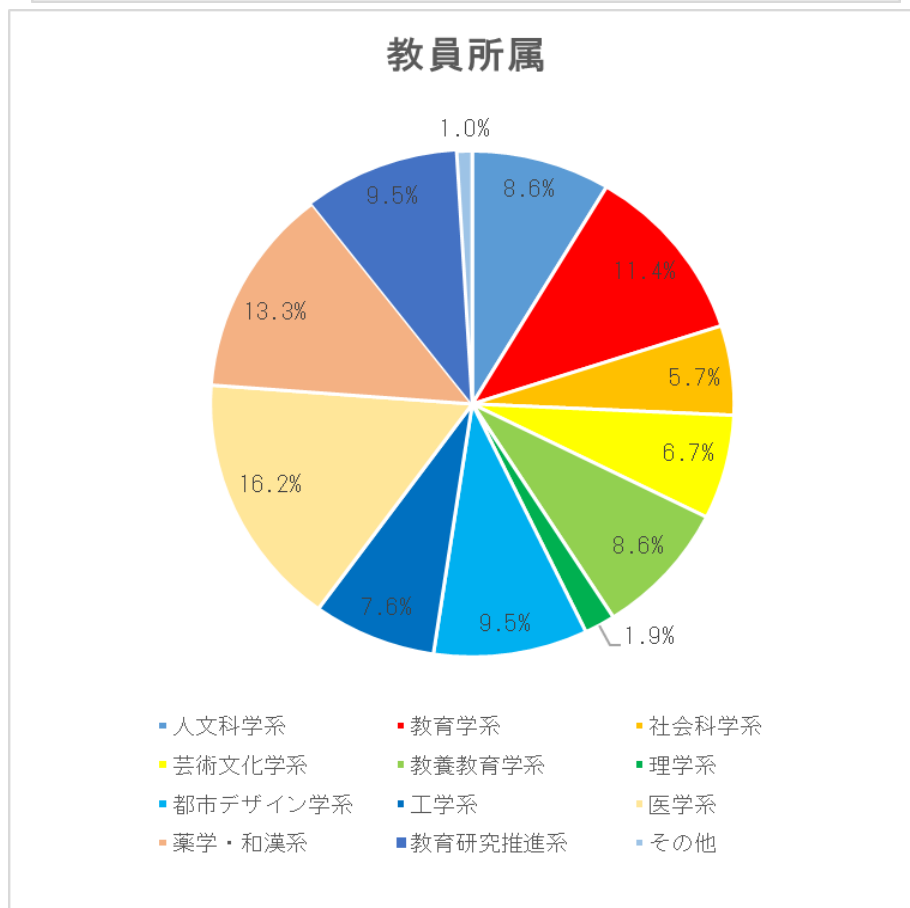
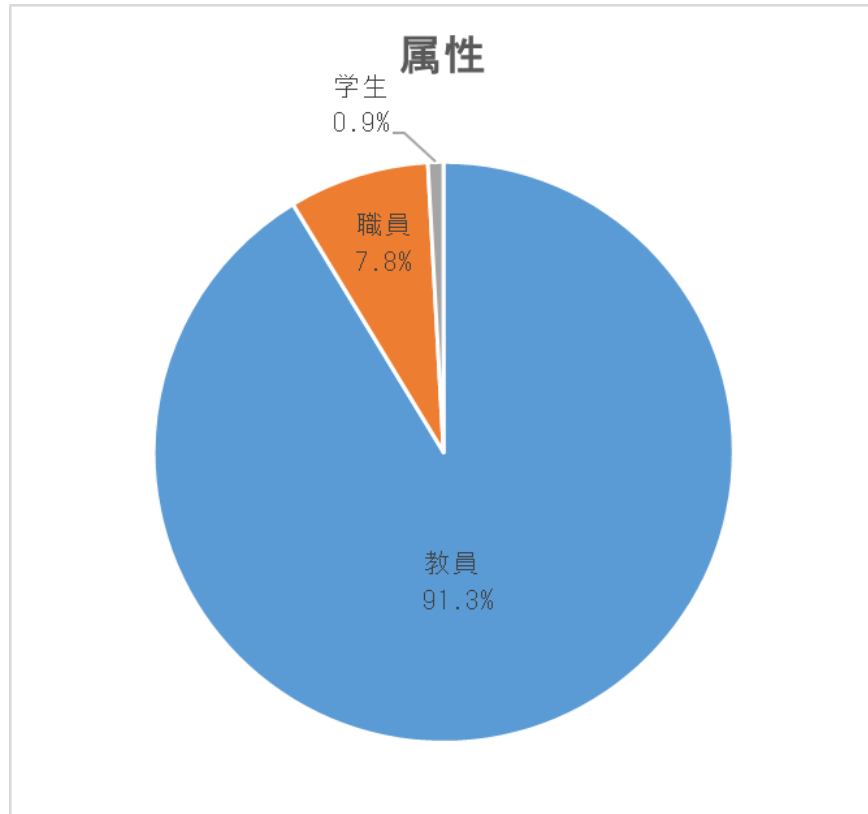
- ア. 人文学部      イ. 人間発達科学部      ウ. 経済学部      エ. 理学部  
オ. 医学部      カ. 薬学部              キ. 工学部      ク. 芸術文化学部  
ケ. 都市デザイン学部      コ. 大学院生

3. 本日の全学FDについて、ご意見・ご感想を自由にご記入ください。

4. 今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、ご記入ください。

## 第1回全学FD2022 参加者アンケート結果

(2022/7/27 時点)



## 【本日の全学FDについて、ご意見・ご感想を自由にご記入ください。】

### <学修ポートフォリオについて>

#### —有用性や効果について—

- ・学生や教員がポートフォリオを実際を使用して役立った点や問題点を、もっと詳しく知りたかったと思います。
- ・ありがとうございます。学生さんから見ると、このデータがどのように使われるのか、進学・就職等に影響があるのかが気になるのでは？という印象を持ちました。以前、筑波大学に勤務していましたが、本日も紹介のあったワークシートを入学時にトートバッグに入れて配布していました。自分の成長を振り返ることができるよう記録する、というコンセプト、たしか読書ノートなどもありました。就職活動時などにエントリーシートを記入する際にも役立つ、というような趣旨だったように記憶しています。コンセプトを明確にしたほうが学生さんも取り組んでくれるのではないかと思います。またインターンシップに事務として対応する際に職員側でも記入を求められるのかどうかも気になりました。
- ・ポートフォリオの活用の成否は、学生と教員（あるいは大学組織そのもの）との信頼感が醸成できているかどうかにかかっていると思います。普段の学生と教員の関わりのあり方や、学生に求めるだけでなく大学側も信頼される態度を示しているかどうか、全学的によく省察した方が良いのではないのでしょうか。
- ・今後導入されるシステムの話などを聴いても仕方がないので、ポートフォリオ導入による教育効果やポートフォリオの有効な活用方法について専門家の話を聴きたかった。
- ・ポートフォリオをうまく運用できれば、学生の学習意欲の向上につながるのではないかと感じました。
- ・どのようなことを実施しようとしているかを知ることができた。有効な活用例がもっと具体的にわかるとよい。
- ・学生、教員の両者にとってメリットとなるシステムにしてください。単に、文科省が言うからやりますでは形だけで、両者にとってメリットは無い。
- ・中高の事例はあまり参考にならないのではないかと感じた。むしろ他大学の例をもっと詳しく説明して欲しかった。
- ・念願のシステムでしたので大賛成です。ただ導入が10年遅かったと思います。会の最後に担当理事が申されましたように「学生に学びを気づかせる、進路に生かす。」は大変理解できますし、それ以外に大学が学生に対してなすべきことはないと思っております。その一方で、入学偏差値の向上、英語・IT教育、キャリア教育、成績の厳格化や留年率の低減等という幾多の事項、相反する事項の実施が現場教員に求められております。これは学生に対しても、精神的あるいは時間的余裕を与えません。制度が総花的に整備されるたび

に学生に対する寛大さが感じられなくなっているように感じます。さらに最近ではGPAを重視するあまり、学生も成績が悪いと判断した瞬間にその授業の履修を取り下げます。

「豊かな教養」とはかけ離れた姿ではないでしょうか。本学の目指す方向がわかりません。

- ・非常に興味深い内容だった。能動的学習の促進という視点からも、学生自らが学習プロセスを省察したラーニング・ポートフォリオの意義は（小・中・高だけでなく）大学においても重要（必須）であると感じた。また、教員もポートフォリオの作成を通して、自らの授業を省察し、学生側に立った授業を設計することも可能になり、授業改善への意識が高まると思う。
- ・教育研究推進系所属ですので、今回のポートフォリオ導入については、部外なのかも知れません。ただ、学生さんが自身で目標を立て、それに自身で工夫して取り組み、成果に対して自己評価をする、さらにそれを教員がサポートする、というのは非常に魅力的だと思います。学生さんが自己肯定感を得て、学習意欲を向上させ、社会に出てからも生き生きと生きていけるようになると嬉しいです。先日、就職が決まったある学生さんから「人からありがとうと言ってもらえる仕事をしたい」と話していただきました。その土台を、このポートフォリオを通して、富山大学で築いてもらえると嬉しいです。大変勉強になりました。ありがとうございました。

#### —運用方針について—

- ・教員個人レベルでは運用法が不明瞭なため、上層部で指針を示してほしいと思った
- ・学生が主体的に記入し、教員が「見なければならぬ」というのではなく、「見ることができる」といった形の活用方法があれば良いかと思いました。
- ・道具は使い方によって価値が決まると思います。どのようにシステム運用していくかを議論していきたいと思います。
- ・今、なにが起きているのかが分かりました。運用は、各学部にまかせていただくことを優先ください。
- ・学生がポートフォリオに自らの記録を記入する習慣を身に付けさせるノウハウが今後必要になると思われます。
- ・一括でなく各部局の状況に合わせた検討が必要であるように思いました。
- ・大学でのポートフォリオの利用の仕方（学生の立場でと教員お立場から）が大変参考になった。確かに部局ごとに活用の仕方も異なるかもしれないし、違ってよいと思います。
- ・中期目標の項目になっているとは知りませんでした。各教科で実施するのかと思っておりましたが連携が必要なように思います。誰がオーガナイズされるのでしょうか？
- ・ポートフォリオとする内容を共通事項と学部による選択事項とすれば、全学の結果・考察を求められるかと思えます。
- ・ポートフォリオに関しては、大学としての基本方針がもう少し明確になっていないと学部としての対応を検討することが難しいです。



・ポートフォリオの有効性をどのような学部で評価したのかが気になりました。谷井先生のお話にもあったようにとくに建築学、デザインのような学部教育では有効な理由が理解出来ました。学部に応じてポートフォリオの標準型をきめて運用する必要性を感じました。

・大変有意義なFDをありがとうございました。ポートフォリオによる教員による学生評価は重要である反面、単なる形式になってしまうことを危惧します。今回先生方の討論にありましたように、学生、教員が、‘ポートフォリオはこんな点で有意義である‘意識が共有されてこそポートフォリオが生きてくるわけで、ポートフォリオを把握して評価する教員不足のために、ポートフォリオは教員は評価せず学生自身の振り返りとして活用するようになった大学もあるとお聞きしています（今回の筑波大のように）。各学部でどのような形式のポートフォリオを導入すべきかよく議論してもらい、形骸化しないように綿密に計画すべきと思います。学生は言われればあまり役に立ちそうになくても仕方なくやります。いかに教員がそれをうまく利用し学生の成長をサポートできるか、にすべてがかかっていると思います。

・富山大学の学修ポートフォリオの定義について（年2回行なっている学生面談とは異なること、学生が大学で何を学んだかについて自己認識を記載するもの）を明確にすることが必要と思いました。

#### —必要性の説明・既存のシステム等との棲み分けについて—

・明確な必要性を明らかにするとともに、既存のシステムとの重複をなくすようお願いしたい。

・ポートフォリオは芸術学部では一般的といえる。それ以外の学部に必要なのか。これまで通り、面接、履歴書、成績証明書で良いといえる。

・ポートフォリオは有効と考えますが、類似の機能をもつ複数のシステムを使い分けることが大変そうです。

・大学生はいつも管理しないといけない存在かな、成人なのに

・学修ポートフォリオについては、今回のように導入ありきでその各論に関するFDをするのではなく、導入の経緯や学生への教育効果の見込みについてご説明頂く機会が欲しかった。小学生の担任教師が学生に向き合うような過保護なシステムが、果たして大学生の自主性の醸成にプラスに働くのかどうか甚だ疑問を感じた。

・谷井先生のお話の最後に「導入に当たっては各学部・学科において導入目的や必要性を明確にして、内容を整える」「教員や学生に意義を伝達し、学部・学科内でコンセンサスを得ることが重要」とあったが、まずは大学執行部が「導入目的や必要性を明確にして」、教務委員長や学部執行部？に「意義を伝達し」、「コンセンサスを得」ようとした方がよかったのではないかと考えます（最後に理事からは一応そのような発言があったが、最初の方がよかったように思います）。かりに文科省から求められているからというのが実情でも。学部が求めたのではないところにいきなり導入目的や必要性と言われても、戸惑って

まいります。 研修会の意見にもあったように唐突感があり、複数の学部で意見がまとめられていなかったように、ポートフォリオ、今回のFDについて情報伝達も不十分であったのではないかと思います。 以上、嫌味な書き方だったかもしれませんが、応援しております。

- ・必要性が感じられませんでした
- ・杉谷キャンパスでは、医療人教育室が主導され、10年来紙媒体にて、ポートフォリオを実施されていますが、それは、撤廃されているということでよいでしょうか。
- ・取り組み自体は良いと思いましたが、教職員・学生共に継続可能かどうか気がになりました。
- ・ポートフォリオが導入されること自体、知らなかったです。教員の負担がなるべく増えない形で、活用できればと思います。
- ・ポートフォリオはプライマリケア学会などでよく用いられており医学的な意味では存じておりました。ディスカッションは大変もりあがっておりましたが、医学部代表者がいなかったのが残念でした。実際には医学部生は実習のときに EPOC2などを導入してきておりますが、まだまだ入力に面倒でまったく生かされていない状況です。
- ・様々な形式のポートフォリオの事例を紹介いただき、参考になりました。一方で、具体的な運用方法や学生が手間をかけて積極的にポートフォリオを活用するのか、学生の私生活について教員がどのように対応するのかなども疑問に思います。

#### —導入に伴う教職員・学生の負担増大について—

- ・ほとんど知らない内容でしたので、とても有益でした。教員の負担が増えてしまうという点については、とても難しい問題だと感じました。
- ・正直、課題以外に負担を増やしたくないので、ポートフォリオの導入には賛成し難いです。ただ、先生方との面談がより有意義になったり、あるいは、私たち学生の将来に関してよい効果があるのであれば、ポートフォリオの制作をしても良いかなと思います。
- ・文系と理系で温度差が大きいように思った。
- ・医学部での導入は難しいと感じた。
- ・教員の「負担感」解消が課題だと感じました。
- ・興味深い取り組みと感じましたが、現在100名を超える授業を担当しており毎回大変です。どこまで対応できるのか不安に感じました。
- ・小中高で行われているポートフォリオの現状をお伺いしますと、学修意欲の促進に非常に有用であると理解しました。実際には、学生の人数と教員の人数で考えると、かなり負担が大きいと感じました。また、担当する教員によっても差が大きくなりそうな印象でした。ポートフォリオが実際に導入されるのでしたら、これらの懸念が軽減されることを期待いたします。

- ・正直、今回のテーマである自己の成長を知るためのポートフォリオについて、必要性が感じられない。また、明らかに教員の負担が増加することが予測できるがそれに対する手当が感じられない。

#### ープライバシーの保護についてー

- ・活発に意見が出て良かったと思います。ポートフォリオに関しては、学生個人にそうしたものを工夫してもらいたいです。人に見られることを想定したものではなく。
- ・ポートフォリオの意義や本学で取り入れる内容の説明であり、運用は各学部委ねられると受け止めました。言い換えると、学生のプライベートな情報の入手についてどう配慮するのかなど、様々なことを学部ごとに検討しなくてはならないとも感じました。その点で、大学として学生の個人情報やプライベートへの配慮が統一して図れるのかなというところは少し疑問に感じました。また、学生や教員にとって有効に機能するように、教員間の共有や学生への周知を図ることが強調されていましたが、今後の活用の程度や効果を各学部が問われるようなことになるのではないかと感じました。
- ・学生の振り返りのための機会を作るということであれば、学生だけが見える非公開化した方が、よいと思われる。教員などが見えるとすると、学生は本音は入力せずに、建前の事項だけを書き入れると想像される。本人だけが見えるツールを用意して、年に1回程度、振り返るような時間を設定して、過去の記録と現在の考えを確認しまとめるような機会をつくるようなシステムの方が、利用しやすいと思われた。
- ・ポートフォリオとプライバシー保護の関係はもう少し詰めた方がよいと思いました。プライバシーが守られない状況では、学生は何も書けないのではないかと思います。
- ・今年度から採用となり学生の状況について把握できていない部分もありますが、良い取り組みだと感じました。ただし、プライバシーの観点から慎重に運用する必要があると思います。また、学生自身がどこまで実直に記入するのかは少し懐疑的です。

#### <FDの実施体制や運営について>

- ・意見交換の時間がすくなかった。
- ・こういう講演会は年に1回は開催すべきと考えます。今回は報告の時間が長過ぎたと思います。
- ・各教員からの懸念表明を含めて、「事前に意見や質問などあればこちらのフォームへご入力ください」のようなものがあると、講演側(質問回答側)としても準備ができ、不足する部分や補足などをリアルタイムで共有するような形式だと、円滑に進行するのではないかと感じます。また、特にPDFを使用した講演では、今どの部分の話をしているのかがわからないことが多いので、iPadなどを使用してわかりやすいオンライン会議にするなどの工夫を望みます。

- ・すみません、追加で書き込みです。今回は教員向けの説明会だけを開催された方がよかったのではないかと考えます。「本学でポートフォリオというものを導入しようと考えていて、ポートフォリオとは～というもので、～という理由で必要だと考えている。については学部で利用しかたを検討して欲しい」という感じです。また、基本、教員向けのものに学生も参加だと、教員の都合（たとえば、負担になる）ばかりを学生は聞かされることにもなり、それもどうかと思います。学生自身は（とくに小グループならまだしも）意見を言いくいのではないかと思います。以上、うるさくてすみません。
- ・最後の事前配布の資料 4 枚と事務職員の方の当日の説明が合致しておらず、説明が分かりにくかった。4時30分終了時間を厳守してください。同じ意見を長々と言う教員の方がいた。
- ・全学を対象としたFDであるが他大学の医学部医学科の事例が挙げられており参考になった。

#### <その他>

- ・様々な意見があり、よかったと思う。
- ・理解が多少なりとも深まりました
- ・↑学生ではないです）なかなか難しいものだと感じた。
- ・このアンケートがおかしい。教員が学生所属にチェックするのが必須？
- ・実際の学生の入力画面や教員からの見方がわかりました。ヘルンシステムの使えない職員ですが、学生は関係なく質問がくるので、対応しなければならないと思いました。
- ・途中所用で聞けなかった時間帯もありますが、本学各学部の先生方のリアクションもお聞きできよかったです。今後も双方向的な検討を進めていただければと思います。
- ・上の3の回答項目が必須項目になっていたのも、とりあえず一つ選びましたが、教員です。
- ・あとフォームに教員と学生の所属を両方選択しないと送信できないのは設計ミスではないでしょうか。
- ・ポートフォリオについての課題や各学部で問題とされている点を共有できてよかった。
- ・高知大学への聞き取り調査を行っていただけることになったのが、何よりの収穫と感じました（感謝申し上げます）。他方で、率直に申せば、小中高校に関する情報は、大学教育（もしくは大学生）との違いという論点に踏み込んでいないので、あまり機能しなかったのではないかと思います。
- ・ご苦勞ですが、今後、持続可能で有意義なシステムになることを願っています。
- ・学生の個人情報との兼ね合いや、任意・義務の線引き、他大学はどういったケースで有効だったのかなど、自分では気が付かなかった点に関して細かく質疑応答されていてよかった。
- ・3は学生ではないのに必須の質問なのか。きちんと確認した質問内容にして欲しい。教員が3.の質問に答える欄がないのに、答える必要があるのか。

- ・興味深く拝聴しました。アンケートが不備で、教員なのに3の所属（学生）を回答しないと送信できないです。
- ・ポートフォリオについて少し理解ができたので良かった。
- ・非常に参考になりました。
- ・ポートフォリオについて、ほとんど知識がなかったので、ありがたかったです。
- ・他大学のポートフォリオの事例や、他学部のご意見が色々と聞けて、参考になりました。
- ・今後の参考になりました
- ・大変勉強になりました。
- ・普段あまり触れない様な内容だったので、ためになったと思う。
- ・各学部の意見を直接うかがえたことが収穫だった。
- ・新導入のシステムについての他学部の考えが分かって、有益だった。
- ・各学部から表明されていた懸念はその通りだなと思った。
- ・小中高、他大学、本学の各学部での取り組みを知ることができて良かった。
- ・面白く拝聴しました。
- ・どの様な物か、よく理解できた。
- ・色々な教員の考え方が聞けて良かったと思います。
- ・他大学のポートフォリオが参考になりました。
- ・ポートフォリオの活用に関しての学びがあった
- ・ポートフォリオについて、様々な事例を通して学ぶことができました。
- ・教授会でも一切話のない状況下で少々戸惑った
- ・①配布資料1で、いきなりポートフォリオという言葉が出てきて戸惑った。日本語でどういう概念なのかを説明するスライドがなかった。②配布資料1の17ページに子供自身があるが、これは「小学生自身」に変更すべきと思う。教育者が小学生を子供扱いしているスライドであるので、よろしくないと思う。③配布資料2はわかりやすかった。このスライドを最初にプレゼンしてもらった方がよかったと思う。④配布資料3は字が小さくて、全く理解できなかった。
- ・前任地で研修医評価でポートフォリオのことは聞いていたが、今回、各学部におけるポートフォリオに対する様々な意見、懸念があることを知り勉強となった。
- ・ポートフォリオについて、勉強になりました。小学生からポートフォリオが教育現場で活用されていることを初めて知りました。大学でも活用されたら良いと思います。
- ・他大学の事例も挙げてそれぞれの特徴や長所を比較していたのが大変勉強になりました。
- ・他大学の事例等を伺い、また、各種のご議論により、位置付けについて理解が深まった。
- ・ポートフォリオ、キャリアカルテについて、わかりやすい資料で参考になりました。
- ・勉強になりました、ありがとうございました。

**【今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、ご記入ください。】**

—学修ポートフォリオについて—

- ・ポートフォリオに関しての取り組みでより具体的な話を聞きたい。
- ・他大学 e ポートフォリオ導入の成功例について

—ルーブリックについて—

- ・ルーブリックも含めて、今回のような一般的な情報をいただけるとありがたいです。

—学修成果の可視化について—

- ・学修成果の可視化。

—修学上の配慮・経済的支援を要する学生への対応について—

- ・心に課題をもつ学生への対応
- ・学生の経済状況やその支援、その財源を大学主導でどう集めるかなど、困窮学生に対する支援問題について

—成績評価について—

- ・成績評価の厳格化と地域社会：富山県の民間企業の採用人事に精通した人を回答者とするアンケートを実施しその結果を報告する研修、もしくは、どなたかをシンポジストに招くシンポジウム形式の研修。現在、採用人事において企業は大学の成績をどのように見ているのか（全くあてにしていらないのか）。今後、厳格化が進めば変わると考えられるのか。
- ・適正な学習目標の設定と成績評価の在り方について

—オンライン授業について—

- ・あらためて「オンライン授業」をとりあげても良いかと思えます。メリット・デメリットについての分析、効果をあげるためには、どのような準備が、学生・教員・大学施設に必要なかを御教示いただければと思いました。
- ・3 キャンパスや他大学とのオンライン等での共同講義の実施法（学生がどこにいても一緒にの教室にいるように感じられる）があればと考えています。

—学生間の学力格差に関する対応について—

- ・学生間の格差（学習意欲、高校までの入試対象外教科の学習レベル等）の実情とそれへの対応
- ・富山大学を受験する学生の偏差値をあげる方法

・学習に課題がある学生にどうチームで取り組んでいくか、卒業できない学生にどうアプローチするか。医学部生は卒業できないと非常につぶしがきかず、卒業しても十分な医師としての能力がない場合、患者さんに不幸な転帰をもたらさうするため切実な問題です。

#### —アクティブ・ラーニングについて—

- ・コロナ禍において実施可能なアクティブ・ラーニングとはどのようなものか
- ・学生が主体的な学びができる参加型授業の作り方についてお聞きしたい。
- ・今年度から医学系でも90分講義の中で学生討論の時間を取り入れるとのことですが、どのような討論が効果的なのか、正直わかりません。自分なりの考えで行っていますが、まず討論することで何を学生に求めているのか(アクティブラーニングでは、学生は教員にどうしてほしいのか)、参加意欲のある学生、ない学生が混在している状況など困った時の適切な対応など具体例を挙げてお話ししていただくと助かります。

#### —授業運営について—

- ・試験問題の作り方
- ・今までにもたくさんのFDを開催していただいておりますが、いろいろな先生方の授業の工夫を聞かせて頂く機会をさらに増やしてほしいです。

#### —国際化への対応について—

- ・国際化の動向および国際化への対応

#### —キャリア教育について—

- ・小中高、とキャリア教育の礎が十分できていることがわかりました。円滑な高大接続の展開として、各学部でキャリア教育がどのように実践されているのか情報共有をしていただける場があればよいと思います。

#### —大学教育全般について—

- ・本学の教育の現状について
- ・大学教学上の課題
- ・教養教育と専門教育の関係性/接続性/独立性(本学教養教育院と各学部の関係性は改善の余地が大きいと思います)
- ・富山大学のランキング(2022年 THE、総合87位)、つまり大学の内容の改善について

#### —プレゼンテーションについて—

- ・聴衆を魅了するプレゼンテーションについて、WEB時代のプレゼンテーションについて、

など。

#### —その他—

・アンケートのフォームにバグがあります。学生でないのに所属をチェックしないと終わらない。

・学生ボタンを芸術文化学部を選択しましたが教員です。

・教員なのですが、所属の学生を選択しなければ送信できないと出てしまい、担当している学生が多い医学部を選びました。もしこちらの操作ミスでしたら大変失礼致します。

テーマではなく、このアンケートの不備についてご連絡します。項目3が必須となっていますが、項目1で「教員」を選んでも、学生用の項目3に答えないと送信できません。仕方なく適当に記入しましたが、当方は教員ですので、項目3は無意味であり、集計には使えません。お知らせまで。

・特にありません。(上記属性で教員を選択しても、学生の所属を選択するよう求められる設定になっています)

・特になし(複数回答)

・学際的共同研究



## 2. 第2回全学FD2022

「アフターコロナの大学教育のニューノ  
ーマル:教育の質の転換をめざして」

実施報告

## 全学FD2022「アフターコロナの大学教育のニューノーマル：教育の質の転換をめざして」

### 開催趣旨

全学FD・教育評価専門会議議長 教養教育院 谷井一郎

コロナ禍で大学教育は変革を余儀なくされました。対面に戻った今、この変革を振り返って新しい教育スタイルを模索すべきではないでしょうか。対面授業でも、コロナ禍において作成した講義ビデオなどの教育資産を利用する教員が多くなります。学生の中には、授業だけでなく講義ビデオを利用してほしいという要望があります。また、遠隔授業で作成した教育資産を利用すれば、不登校や海外在住で来日できない留学生などこれまで対応できなかった学生にも手を伸ばすことができます。しかし、コロナ禍に作り上げた教育資産をどう利用してよいか、戸惑う声も聞かれます。

本研修会では、日本におけるインストラクショナルデザインの第一人者である熊本大学教授の鈴木克明先生を講師として迎え、コロナ後の大学教育はどうあるべきかを考えます。鈴木先生はご所属の熊本大学教授システム学研究センター教授システム学専攻において、日本では他に例を見ないe-ラーニングシステムのみで、大学教員のみならず産業界の人材育成をされています。また、「教材設計マニュアル」「授業設計マニュアル」などインストラクショナルデザインに関する多くの本を著されています。最近では、同期型教育と非同期型教育を組み合わせた新しい教育スタイルを提言されています。

本研修会の参加者には事前に鈴木先生の講演ビデオ・論文で研修内容に関する基本的情報を学んでもらい、大学教育に関する様々な疑問・質問を提出していただきます。研修会当日に、講師から質問に対する回答およびその背景となる考えを説明していただく、いわゆる反転授業型の研修会を企画しました。鈴木教授が提唱される同期型と非同期型を組み合わせたスタイルを体験してもらう機会にもなっています。本研修会が、教育の改善をめざす多くの教員の糧となり、富山大学の教育の質の転換に繋がることを願います。

2022年9月29日

## 第2回全学FD2022 プログラム

日時：9月29日（水）13：00～16：15

会場：第1部：五福キャンパス共通教育棟A棟4階 学務部会議室

（Microsoft Teams 会議を利用したハイブリッド開催）

第2部：五福キャンパス共通教育棟A棟2階 A22教室

テーマ：アフターコロナの大学教育のニューノーマル：教育の質の転換を  
めざして

### 【第1部】

(1) 開催挨拶・趣旨説明 (13:00～13:05)  
谷井一郎（全学FD・教育評価専門会議議長）

(2) 質疑応答 (13:05～14:25)  
進行：谷井一郎（全学FD・教育評価専門会議議長）

(3) 閉会挨拶 (14:25～14:30)  
磯部祐子（教育推進センター長）

休憩 (14:30～14:45)  
学務部学務課担当者

### 【第2部】

(4) 交流座談会 (14:45～16:15)

## 参加者への事前課題

1. コロナ以降の高等教育デザイン：何を指して何を残し何を始めるのか

<https://edx.nii.ac.jp/lecture/20210917-07> (10分程度)

鈴木克明：第40回大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」 2021年9月17日 国立情報学研究所

2. 無理はしないで同じ形を目指さないこと：平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン

<https://edx.nii.ac.jp/lecture/20200417-09> (10分程度)

鈴木克明：第4回大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関DXシンポ」 2020年4月17日 国立情報学研究所

(参考資料)

・鈴木克明：Student Successのための学習支援のありかた：次世代大学を創るための21の提言

<https://researchmap.jp/ksuzuki0120/presentations/33746574> (5ページ)

日本リメディアル教育学会第16回全国大会講演予稿、2021年8月19日

・鈴木克明・平岡斎士：ICTを活用した授業デザイン原則の提案 -交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて-名古屋高等教育研究第21号、2022年3月

<https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no21/08.pdf>

(23ページ)

### 【当日参加者内訳】

教員	
役員	2
人文科学系	3
社会科学系	2
芸術文化学系	1
教養教育学系	15
理学系	2
都市デザイン学系	3
工学系	10
医学系	9
薬学・和漢系	5
教育研究推進系	7
小計	59

職員	4
----	---

他大学教職員等	2
---------	---

合計	65
----	----

### 【オンデマンド参加者内訳】

教員	
人文科学系	2
医学系	1
薬学・和漢系	1
理学系	1
小計	5

合計	5
----	---

総計	70
----	----

## 事前質問と講師からの回答

⇒事前にたくさんの質問を寄せていただきありがとうございました。それぞれに関単に回答するとともに、講演の中で参考資料を提示していきます(隠れた意図:手ぶらで参集するのではなく、事前課題に対する質問を事前に提出してもらおう作戦は、研修でも講義でも有効な場合があります)。

### 1. オンライン授業に関する質問

- オンライン講義とオンデマンド講義の比較について

オンライン同期型講義を実施した教員は、臨場感を大事にしているということではないか思います。コロナ禍でオンライン講義を選択した教員に向けてメッセージをお願いします。

⇒臨場感はライブのだいご味ですので、あらかじめ用意して(長年使っている)講義ノートを棒読みしている講義とは異なる魅力があるものと拝察します。コロナ禍でオンライン講義(ライブ)を「選択」したとすれば、そういう意図があったと思いますが、ライブ講義をせざるを得なかった教員も少なくなかったようです。ライブのだいご味が十分ある講義か、さらに効果を高めるにはどうしたらよいか、再検討のチャンスですね。参考:講義が有効な場面、講義の敵ほか(JSETFD セミナー資料)

- オンライン講義の欠点を補う方法について

オンライン型の講義の欠点は、学生が講義を本当に聞いているかどうかわからないことです。ソフトの立ち上げのみを行い、別のことをしている学生が一定数いるのではないかと思います。また、ネットの噂では、オンデマンド型の講義を行った場合、複数のデバイスを使って複数回の講義を視聴したようにみせるといった手口もあると聞きます。このように、講義を聴いていない学生への対応をどうすべきか、お考えをお聞かせください。

⇒講義を聴いているかどうかは対面でもわからないので、オンラインの欠点とは言えないでしょう。聞いているかどうかを重要視しないで、聞いていても聞いてなくても何ができるようになったかを調べることで教育効果を確認すべきだとIDでは考えます。参考:履修主義ではなく習得主義、インプットではなくアウトプット重視。

### 2. 非同期型の方法に関する質問

- 教員側のスキルの問題について

オンライン化が進まない理由は学生側ではなく教員のスキルに問題があるからという話を聞きます。教員側のスキル強化はどのようにすべきでしょうか。また、大学以外の初等中等教育ではどうでしょうか。

⇒学生エキスパートに教員も教わるべきという「コロナ禍以降にも残したいこと」の背景にはこの点がありそうです。初等中等教育でも一気に一人一台が進む中、教員研修が大きな課題になっているようです。何ができるかを知ることから始め、実現するためには多方面からの手助けを得ながらやるというのがよさそうです。

- コロナ禍で広がった格差、コンピュータースキルを使いこなせない学生への対処について

ビデオ「オンライン後に残すべきもの」を見て感じたことですが、昨年のオンラインの講義を行った後、私自身Moodleがかなり便利であることに気づき、講

義資料の配付、課題の出題・提出、学生へのアナウンスなどを Moodle を使って行うようにしました。一部の学生のコメントしかもらっていないが、概ね好評のようでした(いつでも講義資料をダウンロードできる、資料配付回に欠席していても資料を取得できる、資料を忘れてもその場でダウンロードできる等)。私自身も資料を人数分印刷する必要もなく、課題の回収の漏れもない、また提出時刻を後からチェックできる、など便利に使用しています。質問は、このような便利なツールを使いこなせていない学生がいることであり、そのケアをどのように行っていけばよいかです。例えば、課題を提出する際、Word 等を使用してレポートを作成するのではなく、紙に手書きしたものをカメラで撮影して jpg ファイルまたは pdf ファイルとして提出してくる学生がいます。また、レポートを提出したつもりで、別のファイルを提出したり、添付ファイルの形で提出したつもりが添付されていなかったり。このようなツールを使いこなせない学生にどのように対処していけばよいか、お考えをお聞かせください。

⇒便利なことは積極的に使うことで効率化を図ることができます。教員間のノウハウの共有も有効でしょう。学生に対しては、この程度はこれから生き抜く「情報時代のパスポート」(熊本大学1年生の共通目標)だという位置づけで、教員以外のヘルプを得ながら習得してもらおうのがよいでしょう。

- 非同期型の課題の量について

オンラインにしたことで時間外にこなす課題が急増し、学生が対応できないほどになった大学があると聞いたことがあります。課題の総量調整はどのようにすべきでしょうか。

⇒今までが少な過ぎたとすれば、多くして勉強してもらうこと自体は悪くはないはず。✓ 切を柔軟にしたり、教員間で時期の調整する必要はあるかもしれません。

- 時間のリソースをどう割いていくか

コロナ禍でオンライン授業の効果も実感し、今後より発展的にどう活かすか、が課題になるのは理解できます。ただ実際に大変だったということがあり、我々教員の時間のリソースをどう割いていくかということを考えると同時に、学生のほうも忙しくなる一方なのではないかと思ひ、時間のリソースどう効率よく使わせるか、というのが今後課題になっていくのではないかと思いますがいかがでしょうか。

⇒効果・効率・魅力を最大限にすることが ID の目指すことですので、重要な視点です。上の Moodle の便利さのように効率化を図る一方で、本来学生が学んで卒業すべきことの習得を目指すためのワンラックアップをねらっていく方向での改革が求められていますし、ICT 活用によって「働き方改革」を進めることもできるでしょう。

参考：ID の目的 (効果・効率・魅力)

- 非同期型での双方向性について

コロナ禍での遠隔授業でオンデマンド講義ビデオと授業内容の理解度を確認する小テストを Moodle 上で実施しました。このやり方は完結しているように思えるため、対面授業に戻ってもこの方式をそのまま実施し、通常の授業を行わな

いという事例もあると聞きました。しかしこれでは学生と教員の双方向性というものがなくなってしまうように思います。双方向性は教育にはとても重要なポイントだと思うのですが、この点に関して非同期型で特に注意すべきこと、重視すべきことはなんでしょうか。非同期型の双方向性という点で「可能な限りフィードバックを与える」が大事なポイントだと思いました。フィードバックについて具体的にご教授ください。

⇒やれることは全部、非同期型で実現したとしても、それではカバーできないことが残るとすれば、それがライブの双方向性を駆使してやるべきことです。フィードバックは学生が自ら得られるように工夫し（例：自動採点式クイズ、学生間の相互チェック）、教員の手を経る必要があるものを厳選して、フィードバック後の修正・再提出を前提に、個別にタイムリーに対応していくのが有効です。

- オンライン活用に当たってのセキュリティの問題について

オンラインを活用した講義や双方向に学生とやり取りを進めたいと考えていますが、それらの情報の受け渡しの際のセキュリティ面で気をつけるべきことがあればご教授ください。

⇒盗まれて困るもの以外はあまり気にしないことです。LMS内は安全と考えていいですが、学生に持ち出されないように一般的な情報リテラシーや倫理教育が前提です。

- ブレンド型教育について

鈴木先生が提案される非同期型教育は、オンラインデジタル（講義ビデオ、資料配信、確認テストなど）とオンキャンパスアナログ（課外自習、協働型学習、ピアチュータリングなど）のどちらも充実していて、ここまで非同期型授業が充実すると、同期型授業がかすんでくるように感じます。強いて同期型授業が必要あるのかという極論が出てきそうですが、いかがでしょうか。

これからの同期型授業の役割についていかがお考えでしょうか。

⇒やれることは全部、非同期型で実現したとしても、それではカバーできないことが残るとすれば、それがライブの双方向性を駆使してやるべきことです（再掲）。同期型授業には、動機づけとペースメーカー機能は、最低残ると思います。しかしこれはオンライン（ライブ）でも実現可能なので、キャンパスに来る意味を何に求めるのかは別途検討する必要がありそうです（例：学び合い、教え合いを含めた交流、施設の活用?）。

### 3. 高等教育のあり方に関する質問

- 学習目標について

私が以前見た例として、学習目標が何か分からないまま、教科書に従って講義しているというケースがあります。教科書の知識と理解が学習目標と言えそれまでですが、このような教え方に反発を感じる学生はいます。教科書に準じて教えることについて、鈴木先生のお考えをお聞かせください。

また、理系の専門科目・専門基礎科目では知識ということが重視されるのですが、その先に知識を現象の理解に結びつける、知識を応用するということが学習目標になります。目標を先の方に持っていくほど教えることは難しく、知識の定着のない学生、特に1年生に教える場合、知識の活用を学習目標にするこ



とは難しく感じます。この点について苦労している理系の教員向けにアドバイスをいただけないでしょうか。

⇒教科書が良くデザインしてあれば、それに従って授業を展開することで高い成果が得られます。そうでないとすれば、教員がより挑戦的な課題を作成・提示し、教科書は課題解決のためのリソースとして活用すると良いでしょう。高い目標を目指すためにはより多くの工夫が必要ですが、1年生から可能です(小学生でもやっています)。大学レベルの知識活用を実現する教育は、研究者としての経験を有する大学教員にしかできない専門性の一つです。

参考：逆向き設計、パラシュート型勉強法

- 知識重視の教育について

知識重視の講義型の授業では、通常の授業の間は受け身で授業を受けていた学生も試験前になると本気で勉強します。これまではそれで充分だと考えてきたのですが、鈴木先生のお話を聞いて、試験以外の通常の期間に学び続けるしくみを教員側が提供していかなければならないと思いました。私のように定期試験での勉強で充分と考えている教員は多くいると思いますが、そのような教員に向けてひと言お願いします。

⇒そのままでのよいのかを問い直すビッグチャンスですよ。

また、国家資格を取る学部では持ち込みなしの定期試験は国家試験の模擬試験に当たる定期試験では必須かと考えます。しかし、鈴木先生が提案されているように、これでは知識の理解までは扱えるのですが、どうしても暗記型の勉強になり、応用や創造レベルを扱えません。理想は鈴木先生の提案されるものですが、実際になると二の足を踏む方が多いと思います。このような悩みを持つ教員へのアドバイスをお願いします。

⇒国試対策は、授業以外の自習環境で取り組んで自分の実力を診断できるように準備しておくことと真剣に取り組みます。授業はそれを超えた内容を目指すことでプロフェッショナルを養成するとともに、間接的に国試対策にもなりますが、国際対策は単位取得とは結び付けられないのが肝心です。

- 知識詰め込み型から理解・応用・創造レベルの教育への方策

大学生が本来自分の責任で学びたいことを学ぶという姿勢を身につけることを教員がサポートするというのは全くの同感です。しかし、所属の薬学部などのように資格取得のために知識を身につける必要がある場合には、知識詰め込み型の教育になりがちな部分が多くありますが、その際に「理解・応用・創造レベル」の学習にするための方策がございましたら、ご教授ください。

⇒国試合格をゴールにするのではなく、プロになったときの実務の準備にするとよいです。覚えることを目指すのは効率が悪く、使えることを目指すと覚えてしまえます。

参考：逆向き設計、パラシュート型勉強法(再掲)

#### 4. 成績下位の学生への対応(伴走者としてのあり方)に関する質問

- 成績下位の学生への対応

できるだけ手を差し伸べないことが学生の自立性を高めることになると考えますが、そうすると完全に落ちこぼれてしまう学生が出てきます。ここにジレンマを感じている教員も多くいます。伸びる学生には手を差し伸べないでどんどん自律的に学ばせる、と同時に自力では学習できない学生には支援の手を差し伸べます。このあたりはプロフェッショナルな領域のスキルです。具体的に何かヒントを教えていただけないでしょうか。

⇒誰がどこまでできているかを常にモニタリングして対応できる仕組みが必要です。  
参考：逆向き設計、パラシュート型勉強法（再掲）

- 教えすぎないことについて

教えすぎないというのは簡単ではなく、抵抗のある教員もいると思います。特に必修科目や国家資格を取るための試験のある学部では、成績下位の学生を引き上げることが命題になっています。成績下位の学生に基準を合わせると、手取り足取りになってしまいます。この呪縛をどうしたら逃れられるか、良いアドバイスがあれば教えていただけないでしょうか。

⇒教員としては、馬を水場に連れていく努力をする（例：頻繁に課題を出す）ことも大事ですが、水を飲むのは自分である必要があるということを理解させることも重要です。実力診断のチャンスを頻繁に用意し、その結果を個々の学生に知らせて、どうするかを具体的に自分で計画させるというお節介も有効です。

参考：アクションプラン、自己主導学習、タイムマネジメント（『学習設計マニュアル』）

## 5. アフターコロナの大学のニューノーマルに残したい5つの要素についての質問

- 意味生成のための協働的テクノロジーについて

お話を聞いて取り入れてみたいと考える教員のために具体的な実践事例を詳しくお話ししてもらえないでしょうか。

⇒例えば、グループで考えをまとめるワークをする際に、GoogleDocsを各グループに1枚ずつ用意してそこにメモを取るように促す。教員は各グループがどのような意見交換をしているかをGoogleDocsを見ながら把握でき、他グループの議論を学生が後から覗きに行くことも可能になります。会議システムでブレイクアウトする際に便利です。

- 意味生成のための協働的テクノロジーとして Google document の利用方法について

授業において Google ドキュメントを用いるという発想がなかったため、大変勉強になりました。私のゼミでは、Google ドキュメントを用いて、学生に共同作業をしてもらっています。しかし、学生は「間違っただけを書き込んではいけないのではないか」と萎縮して、Google ドキュメントにコメントを書き込むのを躊躇する傾向があるように思います。ゼミですと、何もコメントしない学生に対して、個別に声がけをしているのですが、授業ではこのような方法は難しいように思います。学生にコメントを躊躇させない工夫などがございましたら、御教授いただけますれば幸いです。

⇒意味生成とは未知のものを探るプロセスなのでそこには正解は存在しない。正解を身につけることに慣れている学生にまず、そのこと伝える必要があるでしょう。

参考：ペリーの発達段階論

- 学習とテクノロジーの学生エキスパートについて

富山大学ではTeaching Assistant (TA)、Student Assistant (SA)は実習、演習系の授業で根付いているのですが、一般講義においてはありません。講義系科目での学生エキスパートについて他大学での実践事例をお示しいただけないでしょうか。

⇒講義実施中の補助役というよりは、ラーニングコモンズなどでのピアチュータリングの授業外での学習支援をイメージすると良いでしょう。日本での先進事例には、名桜大学・はこだて未来大学などがあります。

参考: CRLAのチューター研修認定制度(本センター提供「FD活動デザイン編」)

- インフォーマルバックチャネルについて

「インフォーマルコミュニケーションのためのバックチャネル」というご提案、興味深く拝聴いたしました。対面型の授業で、インフォーマルコミュニケーションを実現する方法としましては、Teamsのチャット機能が想定されるところではありますが、先生は、どのようなツールを用いておられるのでしょうか。御教授いただければありがたく存じます。

⇒同期型の講義は行っていないので経験はありませんが、同期型のオンライン研修ではスタッフ用のバックチャネルとしてはSKYPEなどを別に用意しています。

- 協働学習のためのブレイクアウトルームについて

ブレイクアウトルームをグループワークに活用するだけでなく、利用方法を発展させるとのお話でしたが、具体的にイメージしにくいので、1つ具体的事例を挙げてご説明をお願いします。

⇒グループワークに使うことには違いはありませんが、何のためのグループワークかを特定させることが推奨されているようです。対面授業でのアクティブラーニングと同様に、グループワークをすること自体が目的ではないことを踏まえることが重要です。

- 授業録画の提供について

対面に戻ってから、オンデマンド講義ビデオの活用を考えて授業後に公開したところ、勉強熱心な学生からは評価されているのですが、全体的に学生が積極的に授業に参加してこなくなったように感じています。こうなったのは、後で授業をビデオで視聴できるからであり、しかもビデオの方が自宅で好きな時間に、何度も繰り返し再生でき、再生速度も変えられる等のメリットがあるから、と想像しています。そうすると、対面授業をやる意味はないのか?と考えてしまいます。オンデマンド講義の活用法について良いアドバイスがあればご教授ください。

⇒オンデマンド講義が活用できる状況で、それと同じ対面講義を継続すればそうなるのが自然です。反転授業などのアイデアを取り入れて、オンデマンド講義の存在を前提にして対面授業をアップグレードするチャンスです。

参考：講義が適切な場面、講義にまつわる問題、講義の敵ほか

(出典：日本教育工学会(編)(2015)『大学教員のためのFD研修会ワークブック(受講者用)ver.04』、p. 27)

<b>1：講義が適切な場面 (p116)</b>
<p>(1)情報を広める:多量の教材を短時間に多くの学生に伝達したいとき、アップデートしたり教材を補足したりしたいとき、教員がある領域を紹介したいとき</p> <p>(2)他では入手困難な教材を提示する:既存の利用可能な情報源に情報がないとき、学生が自己流で学ぶには複雑で難しすぎる</p> <p>(3)学生にやらせると時間がかかりすぎる内容を見聞かさせる: 多くの資料からまとめる必要があるとき、学生に時間や情報源、あるいはまとめる技能がないとき</p> <p>(4)学生の科目に対する興味を喚起する:その道の最高の権威者によってユーモアと例題を伴って行われるとき、明瞭で情熱をもって語られ、適切な身振りや動きを伴う</p> <p>(5)基本的に聞き手タイプの学生たちに教えるとき</p>
<b>2：講義にまつわる問題 (p118-)</b>
<p>(1)講義が進むにつれて講話に対する注意力が落ちること</p> <p>(2)教養ある知的な人間のみが聴講から利益を得られるという権威的な学習を志向させること</p> <p>(3)情報に対しての低次元の学習しか喚起できない傾向があること</p> <p>(4)すべての学生が同じ情報を口頭で、同じペースで、講師との対話がない人間味のないやり方で与えられる必要があるという前提に基づいていること</p> <p>(5)学生に講義法を好む傾向がないこと</p> <p>(6)学生の認識能力や認識方法についての一定の仮定に基づいていること (基礎知識が豊富、ノートのとり方がうまい、過剰な情報処理に影響されない)</p>
<b>3：講義の敵(講義の効果を邪魔する障害) (p121-)</b>
<p>(1)前の時間に起きたことや授業に来る途中で起こったことが気になる</p> <p>(2)認知的な処理を妨げる感傷的な気分、怒り、欲求不満</p> <p>(3)居眠り、板書をしながらの音楽、マンガなどの学生の無関心</p> <p>(4)学習内容の理解不能、不足、不正確、不完全な理解(点検する手段が必要)</p> <p>(5)孤立や疎外の感情、思いやりがないとの思い込み</p> <p>(6)楽しく進む講義で教材の複雑さを誤解してしまうこと (高次の論理構築や批判的思考が必要な場面で簡単だと思わせてしまう)</p> <p>※講義法に効果があるとしても、他の教授法との併用をすべき(p.122)</p>
<b>4：インフォーマルグループを併用した講義法 (p123-)</b>
<p>その場限りのグループ編成;毎回の授業でペアを変えることを要求しても良い。</p> <p>1)ペアリング:学生を2人(端数が出たら3人)で組ませる(握手させて紹介しあう)</p> <p>2)導入の話し合い(5分程度):講義テーマについて知っていることを話し合う</p> <p>3)講義1:10-15分程度(成人が講義に集中できる限界)</p> <p>4)ペア討議1(3-4分):講義内容について考えさせる(教員は巡回) 質問への答え、感想や意見、過去に学んだこととの関連づけなどのお題を与える 1. まずそれぞれが答えを書く→2. 共有する(傾聴する)→3. ペアでの答えを作る 4. ペアをいくつか選んでクラス全体に答えを共有させる</p> <p>5)講義2+ペア討議2;同上を繰り返す</p> <p>6)終わりの話し合い(5分程度):学んだことをまとめる話し合い</p>

出典:ジョンソン他(2001)「学生参加型の大学授業:協働学習への実践ガイド」玉川大学出版会をもとに作成

参考：履修主義ではなく習得主義、インプットではなくアウトプット重視

**4 効率は入出口のテストと習得主義で高める**

- ・テストは最後にするものではなく、不足点を確認する道具。
- ・できたらすぐ解放。しかし、できるようになるまで付き合う。

▼**習得主義 vs. 履修主義**

- ・何ができるようになったかで評価→「**修了証**」
- ・何時間学習した(座っていた)かで評価→「**参加証**」
- ・「教えた」と「教えたつもり」を区別する
- ・「教えたつもり」でよければテストは不要
- ・両者を区別して「教えた」というためには必要
- ・区別するためには**良質なテストが不可欠**

鈴木克明(監修)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房 37

**3 効果は課題・活性化・例示・応用・統合で高める**

- ・基礎から教えるのではなく、実務レベルの応用問題から始める。
- ・アウトプット中心設計で、多様な学習者を側面から支援する。

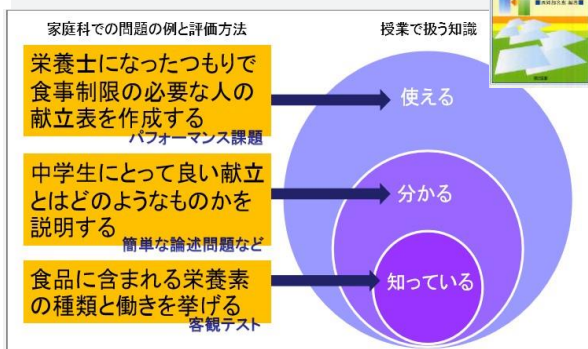
▼**アウトプットを中心に教育を設計する**

「何を教えるかではなく  
何が出来るようになるか」

24

参考：逆向き設計、パラシュート型勉強法

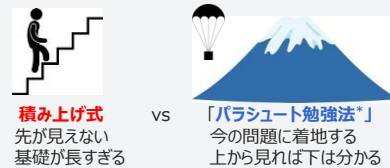
応用から始める：逆向き設計



<http://www.hiroshimac.ed.jp/center/wp-content/uploads/kyougikai/QA.pdf>

基礎から応用へ、ではなく応用から基礎へ

- ・基礎から教えるのではなく、実務レベルの応用問題から始める。
- ・アウトプット中心設計で、多様な学習者を側面から支援する。



\*野口悠紀雄(1995)『IT組!勉強法講義社』

コロナ禍が進めたラーニング DXの加速

©2022 Kikumoto Suzuki, Ph.D 31

参考：IDの目的（効果・効率・魅力）

**1 IDは教育の効果・効率・魅力を高める道具**

- ・IDは教える内容や方法を選ばない汎用的な応用技術(教育工学)。
- ・短時間でできるようになり、もっと学びたい教育を目指す。

▼**インストラクション(Instruction) = 教授する**

- ・授業、研修、教材、取説など教える手段全般

▼**デザイン(Design) = 設計する**

- ・学ぶ人を支援するための設計図を描くこと

▼**目指すは「効果・効率・魅力」の向上**

- ・効果：学習者が目標とする知識・スキルを習得
- ・効率：短時間・省エネモードで効果を達成
- ・魅力：「もっと学びたい」という気持ちになる

鈴木克明(監修)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房 13

**1 IDは教育の効果・効率・魅力を高める道具**

- ・IDは教える内容や方法を選ばない汎用的な応用技術(教育工学)。
- ・短時間でできるようになり、もっと学びたい教育を目指す。

▼**目指すは「効果・効率・魅力」の向上**

- ・効果：学習者が目標
- ・効率：短時間・省エ
- ・魅力：「もっと学びたい」

現在

効果

効率

魅力

目標

GAP 何が足りない?

もっと学びたい

鈴木克明(監修)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房 11

参考：ペリーの発達段階論：学生の認知的発達を促す

受験勉強で「絶対主義段階」の思考に慣れている入学生（「You're the teacher. You tell us.」）を大学における教育を通じてキャリアを見つけるコミットメント段階に向けて育てる。そのためには、研究とは正解が分からないからこそ取り組む価値があり（相対主義段階）、他者を説得できるだけの証拠が必要」という見方ができるようにする（評価主義段階）。ここまで到達すれば、ようやく「学生らしくなった」と言えるのではないだろうか。

■学生視点でみたペリーの認知的発達段階説

	絶対主義段階	相対主義段階	評価主義段階	コミットメント段階
知識の見方	知識は正しいか誤りか、良いか悪いかのどちらかだと信じている。すべての問題に対する答えはどこかに存在していて、専門家はそれが何かを知っている。知識は量的である。	専門家が正解を知らないときには、誰でもが自分の意見を支持することができる。誰もが「誤り」とは断定されない。専門家は何が正しいかをいまだに探索中である。	知識は文脈との関係で捉える。すべてが妥当だが、すべてがいつも等しいとは限らない。視点が有用である。知識は証拠と論理に基づいて評価される。知識は質的である。	学生自身がコミットし、肯定し、決定する。主たるコミットメントには、キャリアを選択すること、宗教や政治の所属を決めること、そしてパートナーを選ぶことがある。
教員	教員が学生を教える責任者である。教員が学生の学びの究極的なリソースである。	教員はそのトピックの権威者である。教員が難しい問題に対する解答を提供する。	教員は多くの学びのリソースとガイダンスを提供する。教員がディスカッションを支援する。教員は学生に新しい問いを作るようにチャレンジしてくる。	教員は学生がコミットし、肯定し、決定したことに興味を持っている。教員は学生が自分の意見を形作ることを許容している
学習目的	学習とは記憶して習得することである。事実や年号、場所、出来事を記憶する。	学生は教材を理解する。単に記憶するのではない。アイデアの重要性に気づき始める。	学生は学んでいることを応用し分析する。異なる複数の視点から検討し、難しい問題を捉える。	学生は情報を統合し評価する。学生は意見を形成し、個人的な意義を見いだす。
期待	学生が何を学ぶべきかを伝えてほしい。シラバス通りに授業をしてほしい。この情報はテストに出ますか？	情報の異なる塊がどのように関連するか理解できるように助けてほしい。自分で答えを見つけることを望んでいるけど、最終的には何が正しいかを教えてほしい。	学生に答えを与えなしてほしい。問題解決にチャレンジさせてほしい。正しい答えはいくつもあるかもしれない。	学生の答えは、それを証拠で支持できる限りにおいては正しい。学生が今学んでいることの個人的な意義を見いだす必要がある。
評価方法	客観式テストが好まれる。正誤式、多肢選択式、組み合わせ式など。	客観式テストに主観式テストを少し加えたい。短答式や空欄補充式など。	主観式テストが好まれる。自分の答えを論理や証拠で支持することができるもの。	主観式テストが好まれる。ある選択や意見に対してコミットすることを求めるようなもの。
成績	もし全問正解ならば、A評価がもらえる。	努力点を認めてほしい。とくに、正解を導く手順が正しく理解できている場合には。	成績には、妥当な理由づけや論理、あるいは証拠で解答を説明する力が反映されるべきだ。	成績が重要なのは理解しているが、私が学んでいるのは学ぶためであり、知識を広げるためである。

出典：鈴木克明（2017）教授・学習過程の革新—教授設計論（Instructional Design）の視座からの提言—。東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 第3号、13-26（表3を再掲）

参考: CRLA のチューター研修認定制度

ピアチューターには研修が不可欠: CRLA チューター研修認定レベルとその要件

認定レベル	(1) 通常 Regular	(2) 上級 Advanced	(3) 卓越 Master
研修時間 <sup>[1]</sup>	10 時間以上	+10 時間 (合計 20 時間以上)	+10 時間 (合計 30 時間以上)
そのうちの直接研修 <sup>[2]</sup>	6 時間以上	4 時間以上	2 時間以上
研修内容	以下の項目のうち 8 以上を含む	レベル 1 の復習の他、以下のうち 4 項目以上を扱うこと	レベル 1 及び 2 の復習の他、以下のうち 4 項目以上を扱うこと
研修項目	チュータリングの定義とチューターの責任、チュータリングガイドラインの基礎(やるべきことと禁止事項)、チューターセッションのうまい始め方と終わり方の技法、成人学習者・学習理論・学習スタイル、アサーティブネス・困難な学習者の扱い方、ロールモデリング、ゴール設定・計画、コミュニケーションスキル、積極的傾聴と言い換え、参照スキル、スタディスキル、クリティカルシンキングスキル、チューター制度の倫理と哲学遵守・セクハラ・剽窃、問題解決モデリング、その他	掘り下げ質問 (Probing questions)、右脳・左脳学習、文化的意識と異文化間コミュニケーション・多様性、学習資源の同定と活用、特定スキル・領域におけるチュータリング、勉強行動の測定と変更、その他	自己主導学習・脳学習・記憶、特定対象集団の扱い方、高等教育における学習センターの役割、学習経験の構造化、チューター研修と監督(監督スキル)、集団管理スキル(グループインタラクティブとダイナミック)、その他
チューター経験	25 時間以上	+25 時間 (合計 50 時間以上)	+25 時間 (合計 75 時間以上)
選抜方法	科目担当教員による面接と書面での許可、あるいは、面接とチュータートレーナーによる推薦+チューター担当科目の成績 A または B 相当		
評価基準	定期的実施され、その結果がチューターに知らされていること		

注: [1] 研修時間 10 時間は、チューター研修 1 科目で置き換えが可能

[2] 直接研修は、トレーナーが監視する、双方向で、ライブで、同期型の研修を指し、ワークショップ・セミナー・対面またはオンラインのディスカッション、セカンドライフ等の仮想環境で実現できる。直接研修以外のものとしては、ビデオ・DVD・Web サイトによる自習、トレーナーや上司との面談、Web クエスト・ポッドキャスト・Web キャスト・Wiki・ブログ、テキスト・配布物・探索ゲーム、プロジェクト等が挙げられている。

出典: 鈴木克明・美馬のゆり・山内祐平 (2011. 3) 大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか: 学習センター関連資格制度についての米国調査報告。日本教育工学会研究論文集 11-1:181-186 (表 3)

<http://www2.gsis.kumamoto-u.ac.jp/~idportal/wp-content/uploads/mimab103jset3.pdf>

参考: 本センター提供オンラインプログラム第三弾「FD 活動デザイン編」

**新プロジェクトがスタート!** 文科省教育関係大学間共同利用拠点: 教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点

<http://kyoten1.cica.jp/moodle/>

**次世代の大学をつくる大学教員のための教育改善スキル修得オンラインプログラム (科目デザイン編) → (自律学修支援編)**

- 多くの大学における教職員職能育成プログラム (FD・SD) は、**現在の**大学での職能を発揮することに留まっている?
- 現状への適応ではなく**次世代の大学を構築していく教員になる準備**と位置づけた挑戦的な内容

↑

**IDの研究成果に基づき、GSISでの実践に依拠**

アウトプットをデザインする

© 2019 Katsuki Suzuki, Ph.D 40

**人材育成について一緒に研究しませんか! 熊本大学教授システム学研究センター**

**文科省大学間共同利用拠点**  
**です。どうぞ活用ください!**

絶賛募集中

いろいろ選べます...

- IDポータルサイト (イベント情報、マガジン、実例等)
- 公開講座ID入門編・応用編、FD講師派遣
- 教育改善スキル修得オンライン講座 (無料版・有料版)
- 科目等履修生から修士・博士課程まで学位取得!
- 共同研究・受託研究で課題解決!

詳細は...教授システム学で検索  
<http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>

**RCIS**  
Research Center for Instructional System

**eラーニング専門家をeラーニングで養成! 熊本大学大学院教授システム学専攻**

6

# 富山大学第2回全学FD2022 参加者アンケート

全学FD・教育評価専門会議

本日は、富山大学第2回全学FD2022に御出席いただき、ありがとうございます。今後の企画の一層の充実を図るため、アンケートに御協力をお願いいたします。（ご回答は右下のQRコードからも行っていただけます。）



- 属性を選んでください。  
ア. 教員                      イ. 職員                      ウ. その他（                      ）
- 所属を選んでください。（※1で「職員」を選んだ場合は回答不要）  
ア. 人文科学系      イ. 教育学系      ウ. 社会科学系      エ. 芸術文化学系  
オ. 教養教育学系      カ. 理学系      キ. 都市デザイン学系      ク. 工学系  
ケ. 医学系              コ. 薬学・和漢系      サ. 教育研究推進系  
シ. 附属病院  
ス. 非常勤講師（教科をご記入ください \_\_\_\_\_）  
セ. 他大学（大学名をご記入ください \_\_\_\_\_）  
ソ. その他
- 全学FD2022に参加しての評価を次の中から選んでください。  
ア. とても意義があった      イ. おおむね意義があった  
ウ. どちらとも言えない      エ. あまり意義がなかった  
オ. 意義がなかった
- 本日の全学FDについて、ご意見・ご感想をご記入ください。  
(1) FDで取り上げたテーマについて

（裏面へ続く）



(2) 研修会のスタイル（反転授業形式）について

(3) その他

5. 今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、ご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

## 第2回全学FD2022参加者アンケート集計結果

(2022/12/1 時点)

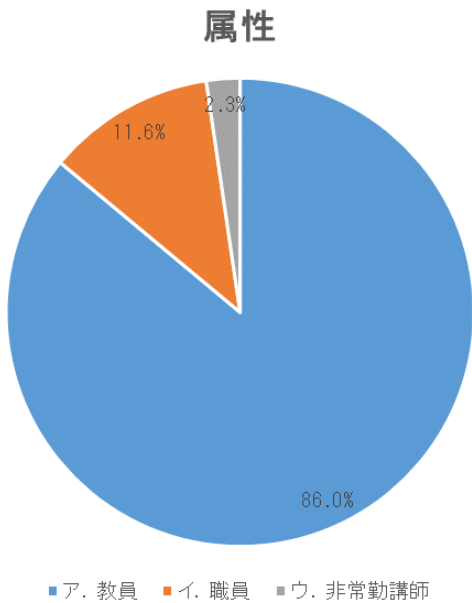
FD参加者数：70名

うち当日参加：65名（内訳：本学教員59名、本学職員4名、他大学教職員等2名）

オンデマンド配信視聴者：5名（内訳：本学教員5名）

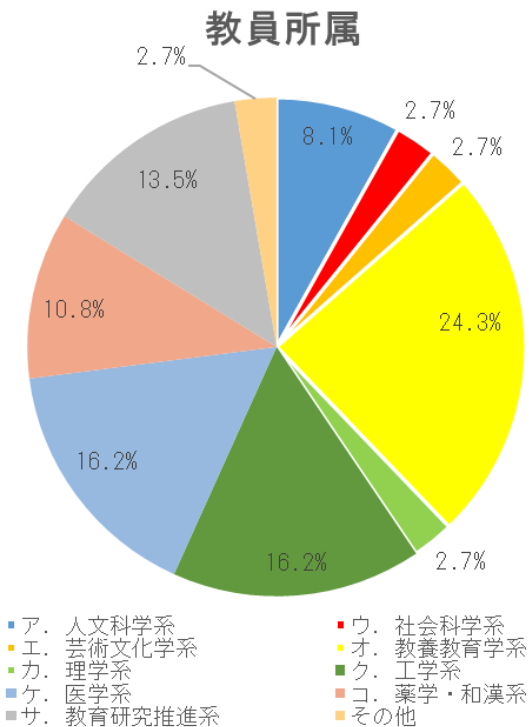
アンケート回答数：43

### 1. 属性を選んでください



属性	人数
ア. 教員	37
イ. 職員	5
ウ. 非常勤講師	1
計	43

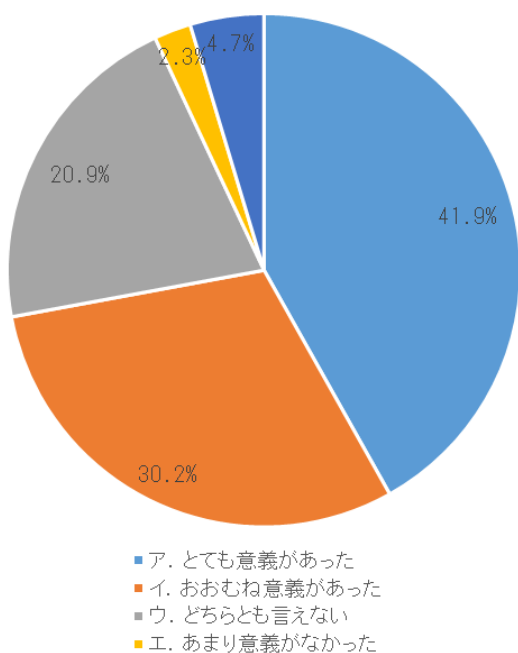
### 2. 所属を選んでください（教員のみ）



教員所属	人数
ア. 人文科学系	3
ウ. 社会科学系	1
エ. 芸術文化学系	1
オ. 教養教育学系	9
カ. 理学系	1
ク. 工学系	6
ケ. 医学系	6
コ. 薬学・和漢系	4
サ. 教育研究推進系	5
その他	1
計	37

3. 全学FDに参加しての評価を次の中から選んでください。

今回のFDに参加しての評価



今回のFDに参加しての評価	
ア. とても意義があった	18
イ. おおむね意義があった	13
ウ. どちらとも言えない	9
エ. あまり意義がなかった	1
オ. 意義がなかった	2
計	43

4. 本学の全学FDについて、ご意見・ご感想をご記入ください。

(1) FDで取り上げたテーマについて

➤ FDに参加しての感想

・一般的な教育の専門用語・専門概念を存じないためですが、大学入学までの教育が絶対主義という用語で説明できること、納得いたしました。ここ数年の傾向なのか、富山大学学生の傾向なのかかわからないのですが、答えを要求する学生が前任地と比較して極めて多い印象があり、概念上整理がついたことで教育に携わる身として少しホッとしました。

・「目指すのは『効果・効率・魅力』の向上」と教えていただきました。これを達成するべく、授業の中で教員-学生/学生-学生のコミュニケーションをどのように工夫できるか、色々悩んでみます。もうすぐ、2学期が始まりますので、試行錯誤もしながら、学生さんへの「良質」な授業を目指します。

・大学教員が普段から（もう何十年も前から）大学教育について思っていることを再確認する機会とはなりましたが、アフターコロナで今までの大学教育の抱える問題をいかにクリアしていくかに対する筋道については、あまり参考にならないお話だったのが残念でした。

・考えや、アイデアはいいものだが、本質的な目的や実現性、また授業を受ける側の学生の意見もたくさん聞いた方が良いなと思った

・「形式ではなく目的」という発想はためになりました。

・興味深い内容でしたが、そもそも富山大学としてオンデマンド型の講義などを積極的に

取り入れるつもりがあるのかがわからず、やってみたいと思ってもできるのか、してもいいのかは疑問が残りました。

- ・非常にためになった。TAに関しても大変有益な話が聞けた。
- ・自分自身の授業を大きく変えるきっかけになるように感じました。
- ・やる気・元気が出ました。
- ・テーマは面白かったが質転換は何をもってとらえるのか結局、十分には納得できるものを得られなかった。
- ・タイムリーで良かったと思います。
- ・非常にタイムリーであり、これからの大学教育の在り方について示唆に富んだ内容だったことから、良いテーマだったと思います。
- ・初めて知ることが多く、非常に勉強になった

➤ FDの運営について

・FDに関しては毎回、ご多忙な中、谷井先生に大変なご苦勞・お気遣いをいただいているように感じております。企画や運営をしていただいていることについて、この場を借りて心より感謝申し上げます。

本日の講師/内容について、何点か意見を述べさせていただきます。

- ・資料をオンライン参加者に事前共有してほしかった と感じます  
→ 聴衆としては何の話をしているのか、しようとしているのか、が極めて見えにくかったです。事前質問でどのようなことが出て、講師としての回答はどうで、それを踏まえたうえでお話を伺えたり議論できたりしたらよかったのではないかと感じました。
- ・反転形式の良い部分が失われているように感じました  
→ 反転授業ならではの当日の議論/学びを活性化する/させるような工夫が、個人的には感じられなかったです（多分に、講師側の問題とも思いますが...）。  
FDではなく、（教育学部などの）講演会としてであれば、これでもよかったのかもしれませんが...。第二部で活発な議論が行われていることを祈ります。
- ・オンライン参加では資料が手元になく、質問の回答が閲覧できなかった。
- ・鈴木先生が最後におっしゃられた「録画される環境で質問することは心理的安全性が保てない」という言葉が印象的でした。確かに自分も録画されている環境の中、発言するのはよっぽど聞きたいとき（そしてそれはめったにない）であると感じています。もっと気軽に質問できる環境として、匿名で質問を受け付けるという方策があればと思いました。

➤ テーマを取り上げる時期について

- ・多くの教員が疑問に感じているテーマであり、タイムリーだと感じた。
- ・時期を得たものであった
- ・もう少し早く取り上げてほしいテーマだった。

➤ テーマの適切性について

- ・今後の教育のあり方を考える上で重要なテーマであり、意義深かったと思います。
- ・テーマとしては良いと思うが。
- ・テーマは適切だと思います。（複数回答）
- ・特になし

(2) 研修会のスタイル（反転授業形式）について

- ・事前の熱心な勉強と参加者の慣れが必要だと感じた。
- ・このスタイルに慣れていない参加者が多いと感じた。参加方法について、事前に周知しておく必要があるのではないか。受講者は研修会中に資料配付されるため、事前に読んでおくことが出来ないことを考慮すべき。
- ・試行としては面白いと思いました。多くの質問に事前に丁寧な回答をいただいたことで参考となりましたが、一方で、その場ではあまり議論が深まらなかったように感じます。そこも盛り上がるのもっと良かったと思います。一つの可能性を示したとは言えると思います。
- ・深まりに乏しかった。
- ・慣れない部分があるものの（聴講者同士での共通認識が得られにくい）、スタイル自体から学びがありました。
- ・講演のストーリーがないので、理解しにくかった。
- ・研修会の学習目標が明確でない中で、反転授業形式である意義はよくわかりませんでした。IDは学習者分析も重要かと思っていたので。
- ・斬新でとても興味深かったです。実際に体験してみて、非常に良い経験となりました。
- ・広く傾向がつかめた。
- ・今後の参考になった
- ・何もなく受講するよりも意味があることがわかった
- ・興味深いスタイルであり、部分的にでも今後の講義に導入していきたいと思いました。
- ・良かった
- ・適切だと思う（複数回答）

(3) その他

- ・鈴木先生の事前回答、ご説明ともに非常に参考になるものでした。できれば第2部も参加して授業設計の工夫などについてご意見伺いたかったのですが、参加できず残念でした。また是非富山にお越しくください。
- ・答えは一つでないというところからスタートする講義と答えは一つしかない国家試験の勉強をどう両立させるのが難しいと感じました
- ・家庭科の例が少し挙げられていたが、具体的な科目の例があれば、さらによかったと思う。
- ・特にありません。

(4) 今後、「全学FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があればご記入ください。

➤ コメントスクリーンの活用について

- ・コメントスクリーンの利用などは富山大学内で実績があるのでしょうか？

<https://utelecon.adm.u-tokyo.ac.jp/articles/question-tools/> そういうサイトを使用している授業があれば、情報共有いただけたらと思いました。

➤ 授業の実施手法について

・学生さんに覚えてもらう事が多い授業/科目で、一方通行にならない授業のやり方を定期的に教えていただきたいです。どこかにアーカイブしていただけると、更に嬉しいです。

➤ 試験の実施手法について

・数学関連で例題を予め設定し、持ち込み可で丸写しの試験を行う教員がいる。試験方法についてのFDがあれば、お願いします。

➤ カリキュラムの体系化について

・教養教育から専門までの体系的なカリキュラムに従った教養の授業科目の構造などを検討してもらいたいです。専門学校ではない、大学で学ぶにあたって教養教育はどのような形になるべきなのか、初修外国語の学びや学問的な理解を不十分な状態で応用的な内容である総合科目を1年生に学ばせるなどがよいのか、十分な検討がなく議論されているような気がします。その点、FDで議論してもらえるといいなと思いました。

➤ その他

- ・今回と同様の内容を別の視点から
- ・特になし

### 3. 各部局におけるFD活動報告

## 令和4年度FD活動報告

部局名 人文学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

- ・授業評価アンケートを継続的に実施
- ・卒業時調査を継続的に実施
- ・教員の学外FD研修会への参加に対する支援
- ・教員対象のFD研修会を2回実施

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

これまで学部FD研修会終了後に実施したアンケートにおいて、教員から要望があったテーマに関する研修会を2回実施した。

#### 第1回学部FD研修会

日時：令和4年9月5日(月) 13:30～14:30

テーマ：最終年度教育への道すじー広島大学総合科学部の事例ー

講師：柳瀬善治先生(広島大学総合科学部准教授)

#### 第2回学部FD研修会

日時：令和5年3月6日(月) 14:00～15:00

テーマ：文系学部でデータサイエンスにつながる学びをどのように提供するか？

ー「情報I」必修修化と学習スタイルの変化を踏まえてー

講師：成瀬喜則先生(富山大学大学院教職実践開発研究科長)

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

・第1回研修会では、コース選択とその後の学生への対応について参照するため、広島大学の事例について、こちらからの問いかけに回答していただいた。他大学の取り組みを知ることができ、本学部の将来を考えるにあたって参考になった。



・第2回研修会では、2022年度から高校で必修化された「情報Ⅰ」で学ぶ知識・技能の概要、近年の小・中・高校の教育現場におけるICTの活用や学習スタイルの変化の実情、③文系学部でデータサイエンスにつながる学びをどのように提供するかについてご講演いただいた。今後大学に入学してくる学生がどのような教育を受けているかについて知ることができ、大学での教育を考える一助となった。

#### 【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

文系学部でのデータサイエンス教育については、課題として残された。  
次年度以降も、教員の多様なニーズに応じた研修が求められる。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 教育学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

令和4年度より、現代的教育課題に対応する能力を持った質の高い教員養成を目的として、金沢大学と連携して教育学部共同教員養成課程を設置した。養成する人材像を「豊かな人間性と社会性、教育への情熱と使命感を持ち、教科や教職に関する専門的知識と技能を身に付け、新たな教育的課題に適切に対応できる実践力のある者」と掲げている。

共同教員養成課程における教育体制・教育方法等の点検・評価を実施するなど、教育の質保証及び教学マネジメントのPDCAサイクルの構築を図るため、両大学の学部長、学類長、副学部長、教務委員長から構成される合同教学委員会を設け、カリキュラムの編成に関する事項、入学者選抜試験に関する基本的事項及びFD活動の方針に関する事項などについて審議した。この教学委員会に、教育方法検討(FD)部会を設置し、両大学合同でのFD活動を企画・実施していくことにより、共同教員養成課程全体の教育内容等の改善を図ることとした。さらに富山大学教育学部ではFD・カリキュラム委員会において、独自に教育体制・教育方法等の点検・評価を実施した。

- ① 学部授業評価アンケートの実施
- ② 卒業時調査の実施
- ③ 授業評価プレアンケートの実施
- ④ 富山大学・金沢大学教育学部共同教員養成課程合同FD研修会
- ⑤ 学部FD研修会

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

#### ●授業評価関連：①③

授業評価の分析結果は、FD・カリキュラム委員会において算出し、全体結果を教授会にて説明・共有している。

#### ●卒業時調査②

学生の修学やそれらに対する評価等について、全学と連携し実施した。

#### ●合同FD研修会

日 時：令和5年3月9日(木) 12:30~13:30(予定)

会 場：教育学部1棟4階「141」講義室

内 容：遠隔授業に関するFD研修会

## ●学部 FD 研修会

### 【第 1 回】

日 時：令和 4 年 6 月 22 日（水）15:00～16:30

会 場：教育学部 1 棟 4 階「141」講義室

講 師：富山県教育委員会 担当者

石川県教育委員会 担当者

講演内容：「富山県と石川県の教員採用の現状と 大学教育学部に求めること」

### 【第 2 回】

日 時：令和 5 年 3 月 20 日（月）教授会終了後（予定）

会 場：教育学部 1 棟 4 階「141」講義室、または 3 棟 4 階「341」講義室

内 容：

(1) 金沢大学アカンサスポータルの使用法・遠隔授業システムの使い方の説明

(2) 『ハイブリッド型の講義における様々な情報機器の活用方法』

### 【得られた成果とその活用】

（FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載）

#### ●授業評価関連：①③

教授法の振り返り、学生とのコミュニケーション、授業の改善

#### ●卒業時調査関連：②

カリキュラムの見直し、進路指導の改善

#### ●合同 FD 研修会：④

本年度の金沢大学との遠隔授業の振り返りと来年度に向けての改善を検討する予定

#### ●学部 FD 研修会

教育学部となったことを踏まえ、教員養成に求められている大学教育の在り方について学部教員の共通理解を得られた。

来年度に向けて、学務情報システムや遠隔授業システムの使用法を再確認する予定。

### 【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

令和 4 年度より開始される共同教員養成においては、金沢大学との遠隔授業が実施されたが、学生の授業評価アンケートなどから、実施方法などに関する改善点を指摘されている。来年度に向けて ICT や各種システムによる深い学びが伴う授業運営について研修する必要がある、引き続き研修を企画する。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 経済学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

昨年度は、セメスター制における前期・後期末に授業評価アンケートを実施した。また、日本評論社の編集者の方を講師として、「オンライン教材の課題」について講演会を実施した。そして、(経済学部1年次生対象の科目である)初年次教育の1コマとして実施したPROGテストの結果報告と、3年次生対象のPROGテストに対するリテラシー及びコンピテンシーの学生個々の能力についての結果の報告及び1年次に受験した時から2年後の学生の成長についての結果報告会を行った。

今年度は、これまでのFDを踏まえて、授業アンケートとPROGテスト報告会を実施することとした。そして、いわゆる発達障害のある学生が増えている状況を考慮して、学生支援センターに講演会の実施を依頼した。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

今年度から、ターム制における各ターム末に(セメスター科目については、学期末に)授業評価アンケートを実施するとともに、FD研修会を3回開催した。

令和4年9月14日には、学生支援センターの栗林睦美特命准教授及び日下部貴史係長を講師として、講演会「コミュニケーションを苦手とする学生への理解について」を開催し、発達障害等ゆえにコミュニケーションを苦手とする学生の実際について学んだ。

次に、令和4年10月12日には、株式会社リアセック キャリア総合研究所 谷川雅之氏を講師として、(経済学部1年次生対象の科目である)初年次教育の1コマとして実施した「PROGテスト」の結果報告が行われた。

また、令和4年12月14日には、株式会社リアセック キャリア総合研究所 谷川雅之氏を講師として、3年次生対象のPROGテストに対するリテラシー及びコンピテンシーの学生個々の能力についての結果の報告及び1年次に受験した時から2年後の学生の成長についての結果報告が行われた。

なお、各回の参加状況は、以下のとおりとなり、研修会の開催日を教授会開催日に設定することで、高い参加率を維持している。

第1回(9月14日)参加者:44名(参加率88%)

第2回(10月12日)参加者:41名(参加率82%)

第3回(12月14日)参加者:42名(参加率84%)

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

授業評価アンケートについては、集計結果を各教員に配布し、今後の教育に役立ててもらおうこととしている。

講演会「コミュニケーションを苦手とする学生への理解について」では、発達障害等を原因としたコミュニケーションを苦手とする学生に対する理解が深まった。また、同講演会においては、授業やゼミなどでの具体的なコミュニケーション方法の実際が紹介され、授業改善の基礎となった。

1年次生向けのPROGテストの結果報告会では、経済学部1年次生の得意・不得意が明らかとなった。これにより、各教員が授業の際に留意すべきことが明らかとなり、各教員の授業改善の基礎となった。

3年生対象のPROGテストの結果発表会では、本学部の3年次生が1年次からどのような成長を遂げているのかが明らかとなった。3年次生は、コロナウィルスの蔓延による遠隔授業の開始した年度に入学した学生であり、遠隔授業の影響がどのようなものかを知る上で、大変貴重な報告であった。報告によれば、学習にかかわる能力が例年よりも伸びているものの、コミュニケーションにかかわる能力の伸びが鈍いとのことであった。

#### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

発達障害のある学生に対して、ある程度の理解はあったものの、それをどのように授業に生かしていくのかが、各教員間の共通理解となっていなかったことが明らかとなった。今後も、定期的に学生支援センターによる講演会等を実施して、発達障害のある学生に対する授業方法について検討していくべきと思われる。

また、PROGテストの報告では、遠隔授業によるメリット・デメリットが明らかとなり、遠隔授業を中心的に受講した学生に関しては、各教員がゼミ等において学生のコミュニケーション能力の伸張に務めるべきことが明らかとなった。現在、本学部の講義は対面授業が原則となっているものの、2年次生、1年次生は遠隔授業を中心に受講した学生である。そのため、FD研修会で明らかになったことを踏まえた授業を実施するとともに、今後のPROGテストの結果にも注視しなければならないであろう。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 理学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

令和4年度は、発達障がいの学生へのサポートに関するFD研修会を、キャリアサポートまで含めて理学部の学生を支援頂いている、アクセシビリティ・コミュニケーション支援室による支援を受けて、11月に開催した。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

- ・日時 令和4年11月9日(水) 13:00~13:30 (教授会開催前)
- ・場所 オンライン (Zoom) 開催
- ・主催 理学部教務委員会・理工学教育部修士課程 (理学領域) 教育委員会
- ・講師 学生支援機構 学生支援センター  
アクセシビリティ・コミュニケーション支援室  
主任コーディネーター (特別支援教育士) 日下部 貴史 氏
- ・テーマ 発達障がいの学生へのサポートについて

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

以下の内容で、発達障がいの学生へのサポートに関して情報共有することができた。

1. 障害者差別解消法等の確認
2. 富山大学における障害学生支援体制
3. 事例:発達障害学生 (自閉症スペクトラム診断) の支援

### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室で支援頂いている学生の学部別の数では、理学部は全学でも工学部に次いで多いことがわかった。しかも指導教員だけでなく本人に自覚がない場合もあり、またプライバシーの問題もあるため、当事者として関わっていない教員には発達障がいの学生へのサポートは見えにくい事柄でもある。本テーマについては、特に本学部では今後も引き続き定期的に情報共有を含めたFDは必要であろう。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 工学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

学部3年生の投票により選出された令和3年度ザ・ティーチャーの教員から、コロナ禍における遠隔授業で取り組んだ授業実施方法の見直しを、対面授業を再開するにあたりどのように活用したか、また、魅力的な授業を実施するためにどのような工夫を行っているかを講演いただき、今後の授業実施に向けた改善・向上に役立てるために研修会を開催した。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

Teamによるオンライン配信により、令和3年度工学部ザ・ティーチャー選出教員4名による学生の満足度の高い授業等の取組みについての事例発表を行った。

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

ザ・ティーチャーに選出された4名の教員による事例紹介を行い、授業の実施に際して心がけていることやコロナ禍の前後での変化等について情報共有を行った。これにより、多くの教員が今後の授業改善に役立つヒントを学んだ。

以下は、講師から紹介された事例の一部である。

- ・ コロナ禍以前はノートを書くことに重点を置いていたが、学生はそのことで満足してしまうという問題があった。令和3年度は講義資料を事前に配信し、ノートを取る時間を削減することで、前回講義の復習や理解度チェック、課題等の解説などに時間を多くとるようにしたところ、学生からの評判良く、受講者の単位修得率も以前より向上した。
- ・ 第1回目の授業(ガイダンス)において、当該科目を学習することで得られる知識や技術が将来どのように役立つのか、社会からどのように期待されるのかを具体的な事例を基に解説を行うことで、学生のその後のやる気を引き出す動機付けを行っている。学生からも、「熱意が伝わった。」、「学生のことをしっかり考えた上で必要な知識を教えてくれた」と評価されている。
- ・ コロナ禍以前は講義資料を印刷して配布し、学生自ら講義ノートを作成させており、Moodle

の活用も行っていなかった。コロナ禍以降、講義資料や課題に Moodle を活用しつつ、学生に講義ノートを作成させるようにしている。また、講義資料について、動画形式で作成し、より学生が理解しやすいよう工夫している。

#### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

講義資料を配信することで、学生はいつでも資料を見返すことができ、教員もより理解しやすい資料作りに努めることで学習効果が期待できる一方、講義ノートを自身で作成させることは、講義のポイントを学生自らが整理できるため、理解度を高めることにつながるというメリットもある。また、講義資料を配信した場合、学生はPC等を利用して配信された資料を見ながら講義を受け、かつノートを作成するため、対応に苦慮するケースもあった。

コロナ禍における遠隔授業の経験から、対面授業にも従来の授業方法に加えて新たな取り組みがなされるようになったが、未だ過渡期にあり、今回ザ・ティーチャーに選出された教員も、学生からの要望を受けて授業期間内に授業方法の修正に取り組んでいる。今後も、学生の満足度や理解度、成績の推移等に注視し、充実した授業が行われるよう更なる改善に取り組む必要がある。



## 令和4年度FD活動報告

部局名 医学部医学科

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

昨今の国内外の医療者教育の流れを踏まえ、教員の教育レベルを上げるべく、医学部教員が知っておくべき、医療者教育の実践についてブラッシュアップを図っている。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

第1回 2022年5月18日17:00-18:30 「JACME受審に向けて」

2022年5月末に受審予定であった医学部国際分野別認証に向けて学内教員に制度の目的、その対応の意義、受審までの教員個々の準備などについて理解を深めた。

第2回 2022年11月15日17:00-18:30 「CC-EPOCの使い方」

医学科4年次、5年次学生の臨床実習の評価をこれまでのMoodleからCC-EPOCに変更するに伴い、各教員にそのシステムの目的、意義、変更点を説明し、臨床実習評価を充実させることで教育の質を上げるための試みとして行った。

第3回 2023年2月27日17:00-18:30 「CBT作問ブラッシュアップの仕方」

CBTが公的化することに伴い、その作問依頼が全国の医学部に来ている。富山大学から提出された問題の採択率が年々低下していることを懸念し、作問のブラッシュアップの仕方を理解することでCBTはもとより、学内の試験の質を向上させる取り組みとして行った。

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

第1回では本学のカリキュラムを履修した卒業生が将来、国際的に活躍するために本学のカリキュラムがどうあるべきかを教員が共有し、受審に向けて理解を深めることができたと思われる。実際に分野別認証受審も滞りなく終了し、最終評価を待つ状況である。今後も国際的な観点からカリキュラム改善につなげていけるものと思われる。

第2回では本学の弱みでもある臨床実習についての評価を新しい評価方法の導入に合わせて学び、今後の臨床実習の質の向上についての議論を行った。実際に評価を続けていくことで質の向上も見込まれると考えられた。

第3回ではCBTの公的化に伴い富山大学からの作問の採択率が低いこと、現場の教員にCBT作問のためのブラッシュアップ講座を実施した。CBTの質の向上のみならず、学内試験の質の向上も期待できると思われる。

### 【今後の課題】

（今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載）

出席率がまだまだ高くないこと、昨今の医療者教育の変革は非常に速いので教員がそれについていくためにはFDの回数をもう少し増やし、大きなものというよりも現場で使える実践的なFDを行っていくことも重要であると思われ、次年度はFDの回数を増やすことを試みたいと考えている。また、CBTとOSCEの公的化に伴い、評価者としての教員のレベルも上げる必要があると考えられる。そのあたりの対策も行っていきたいと考えている。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 医学部看護学科

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

看護学科における過去数年のFDに関する内容は、「看護学科におけるアクティブラーニング」「障がいのある学生に対する支援」「パフォーマンス課題と評価」「Whole Person Careの事例検討とマインドフルネスの教育」などであった。毎年、看護学科の教員がほぼ全員参加でFD活動を実施しており、講義、グループディスカッション、全体討議などを通して、教育に関する情報共有、教育における課題や解決の方向性を具体化してきた。具体的には、令和2年度において教員削減による教員の負担増に対して講座構成の枠組みおよび組織改編を検討し、本学科の組織改変案を作成した。また、令和3年度においては、教員のストレスや心の在り方に関する話題を取り上げ、各自のストレス管理やワーク・ライフ・バランスの実現に意識を向けたことで、これまでの学生や学科組織に対する課題から教員側の課題へと視点が大きく変わった。そして、令和4年度は、本学科の看護学教育に焦点を絞り、これまでの看護学の教育課程とその展開を省察し学科を点検（評価）する段階に入った。FD活動の方法においては、教員が1日参集して行う討論形式ではなく、1カ月間のオンデマンドラーニングによる個々の課題探索形式を用いた。オンデマンドラーニングを用いた理由としては、学科を自己点検する上で、一定の事前学習を要するからである。事前学習の内容には、構造化された評価基準チェックシートの動画説明が含まれている。令和4年度の教員参加率は、100%（27名）であった。

### 【取組事例】

令和4年度のFD活動のテーマは「『分野別評価の審査』受審に向けて—概要の理解—」である。ここでいう分野別評価は「看護学教育カリキュラムやシラバス」「教育・学習方法」「学習成果の適切性」「教員の教授力」など実際の教育活動に焦点をあてたピアレビュー（教員による評価・審査）を指しており、分野別評価の審査を受審する意義として「教育の質向上」「教職員の成長」「社会へのアピール」などが挙げられている。

本看護学科では、令和9年（2027年）に「分野別評価の審査」受審を予定している。そのため、受審する数年前から、看護学科全教員で「申請に関する様式1～19」に沿った書類作成の準備が必要となる。そこで、令和4年度のFD活動のねらいを、【配布資料と課題】を通して看護学科全教員が「分野別評価の審査」の基礎的事項に関する理解を深めていくことにおいた。

本FD活動の出席（参加）については、本看護学科の現状を点検するとともに「評価の観点」ごとの適合度（A・B・C）の回答を提出することで確認した。

### 【得られた成果とその活用】

「評価の観点を概ね満たしている」と23名（80%）以上が回答された項目は、以下のとおり全項目においてみられた。

#### 1. 看護学学士課程のディプロマ・ポリシー等

- (1)ディプロマ・ポリシーは教育目標と整合性がある
- (2)ディプロマ・ポリシーは卒業時に獲得している能力を明示している
- (3)ディプロマ・ポリシーに能力の獲得の判断指標が明記されている
- (4)当該教育課程を修めることにより付与できる資格等が示されている

#### 2. 看護学学士課程のカリキュラム・ポリシーと教育課程の枠組み

- (1)カリキュラム・ポリシーはディプロマ・ポリシーを反映している
  - (2)カリキュラム・ポリシーに基づいて体系的に構成されている
  - (3)専門関連科目と専門科目の連携が図られている
  - (4)教育課程は看護学の基礎を効果的に教授する科目構成となっている
  - (5)科目の学年配置、あるいは前提科目等が適切である
  - (6)高大連携や初年次教育を意識し大学で学ぶための心構えを作る工夫がされている
- 一方で、「評価の観点を満たしていない」と2名以上が回答された項目および課題・改善箇所等の一例（概略）については、以下のとおりであった。

#### 1. 看護学学士課程のディプロマ・ポリシー等

上述の(3)(4)

課題・改善箇所等：能力のパフォーマンスをどのように評価するかを明記すべき。

#### 2. 看護学学士課程のカリキュラム・ポリシーと教育課程の枠組み

上述の(1)(2)(3)(4)(5)

課題・改善箇所等：カリキュラムマップは大枠で困って科目が示されているのみで、体系的に読み取ることが困難であるため、学生が理解できる各科目の位置づけを示すべき。

本年度の看護学科 FD 活動の結果は、次年度以降の看護学科 FD 活動のテーマ設定の検討時に活用される。

#### 【今後の課題】

構造化された評価基準チェックシートを用いて、看護学科全教員で本看護学科を評価した結果、「評価の観点を概ね満たしている」と100%の回答を得た評価項目は0個であった。この結果は、令和9年（2027年）に「分野別評価の審査」の受審を予定していえる本学科において大きな課題といえる。「分野別評価の審査」の受審の2年前までには、全評価項目において100%の教員が「評価の観点を概ね満たしている」との回答を得たい。そのためには、「評価の観点を満たしていない」と回答した教員が指摘した「課題・改善箇所等」の記述内容を吟味し、適切な対応策について検討を重ねていく必要がある。

なお、今回の点検項目は「分野別評価の審査」の一部の項目のみであるため、未点検の「評価の観点」を追加して、受審への対策を備えていかなければならない。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 薬学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

令和4年度の薬学部・大学院薬学系部会FDは、学部の課題として令和5年度以降本格導入される学修ポートフォリオの活用について、および令和4年度からのカリキュラム再編の年次進行により令和5年度から実施される創薬科学科のコース分属と特別専門実習の実施の具体的内容について議論した。また、大学院の課題として、全学的に推奨されている大学院教育における異分野融合の促進について、および令和4年度から改革された新大学院の大学院講義のあり方について議論した。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

#### 学修ポートフォリオの活用について

- 薬学部としての活用方法について意見交換を行った。面談や就職活動などに活用できると考えられる一方、自主的に記入する必要があるので、利用したメリットを明確にすべきという意見があった。
- 学生が入力する際のモチベーションについて、学生自身がどれだけ正直に記入するか、また「誰の」「何の」ために学修ポートフォリオを作成する必要があるのか、ということがはっきり示せないとは入力は難しいという意見があった。また、書きたくなるようなインターフェースがあれば、学生は積極的に記入するのではないかと考えられる。
- 記載内容に関するプライバシーについて、記載内容の公開範囲を自分で設定できるようにすることが必要なのではないかと意見や、管理されていると思うと書かないのではないかと意見があった。

#### コース分属と特別専門実習の実施について

- コース分属の選択に必要な講義としてコース概論が設定されているが、こちらの開催方法についてオンデマンドでの実施が妥当であると議論された。また、コースへの分属方法について、成績順分属との方針は決まっているが、科目の重み付けについて、専門・教養科目の得点配分や科目選定も含めて、シミュレーションを行って、より良い重み付けの形を、今後探るべきと議論された。
- 特別専門実習について、具体的なグループの人数や研究室の担当時間などの実施方法や実施

内容について議論が行われた。また、評価方法についてもそれぞれの研究室毎に採点する形で進めるとの議論が行われた。

#### 大学院関連

- 大学院教育における異分野融合の促進については、異分野融合を促進するために、異分野融合の必要性、これまで異分野融合が進まなかった理由などについて、意見交換を行った。合わせて、大学院講義のあり方についても意見交換を行い、今後、学生の意見を吸い上げ、今後の講義に反映させることが重要との意見が挙げられた。

#### 【得られた成果と活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

- 今年度のFDでは、令和4年度入学生からの学部カリキュラムの改革ならびに同時期に新大学院への移行が並行して行われたため、それらに対応すべく全教員への周知ならびに新制度に対する具体的な議論を行った。これらFDでの議論や、教授会における周知により、令和4年度開始の学部新カリキュラムならびに新大学院に対する教員の理解が深まった。
- 具体的には、学部では学修ポートフォリオの活用方法に関して具体的な議論が行われ、学生および教員側からの視点で見た際の有用性を検討した点、および令和5年度から創薬科学科において実施するコース分属ならびに特別専門実習に関して、実施方法や評価法に関して各教員の意識を高めることができた。
- 新大学院に関しても実際の学生のアンケートを基に、学生の意見を尊重した意見交換を行うことにより、オンデマンドでの実施に対するメリット、デメリットを課題として抽出できた。

#### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

- 学修ポートフォリオについては、学生に「誰のために、なんのために書くのか？」目的がわからないと活用方法も明確にならないと考えられる。さらにこれらの閲覧可能な範囲についてもどこまで可能にするのかについて議論を進める必要がある。
- コース概論については、各研究室でどのような時間配分でオンデマンド講義を作成するのか、また医学部の研究室の担当分をどのようにするのかなどを決定する必要がある。さらに、コース分属と特別専門実習については、成績を用いた順位の決定についてよりよい重み付けの形を決定する必要がある。
- 大学院における異分野融合の促進や大学院講義については、実際に実施が進んでいく際の学生の反応を精査し、今後研究への取り組み方針、ならびに講義内容や成績評価方法の適正化を模索する必要があると考えられた。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 学術研究部芸術文化学系

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

6月22日と令和5年2月17日に芸術文化学系のFD研修会を実施した。また、全学FDや教養教育院のFD研修等を随時学系内に案内し、積極的な参加を促した。

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

(1) 6月22日、富山大学保健管理センターの西山志満子講師に、「学生の精神的不調への気づきと対応」のタイトルで講演いただいた。「思春期・青年期の心理的特徴と精神疾患」「学生のストレスイベントと自殺の現状」「学生に対するサポート・連携のポイント」についてお話しいただき、西山講師と学系の教員との間で、学修や生活面で悩みを抱える学生にどのように接するべきかについて、質疑応答や意見交換を行った。

(2) 令和2月17日、富山県こどもこころの相談室・臨床心理士の深澤大地氏に、「メンタルヘルスの基礎と支援のポイント」のタイトルでご講演いただいた。特に「コロナ禍における学生の変化」「学生から相談を受けた際の話の聞き方、アドバイスの仕方」「職員のメンタルヘルス」についてお話しいただき、深澤氏と学系の教員との間で、相談を受ける際の心構えや主体性の引き出し方について、質疑応答や意見交換を行った。

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

2回とも学生のこころの問題への対処に関するFDとなったが、それぞれ異なる視点での講演であった。コロナ禍での学修や生活が続き、また新任教員も増える中、学生の心のケアについて、理論から個別事例、また具体的な方法まで聞くことができたので、今後の指導に活かせると考えている。

### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

- ・障害のある学生への学修支援をどう行うか
- ・STEAM教育を推進するために教員に必要なこと
- ・芸文におけるPBL教育の問題点・課題
- ・基幹教員とは何か

など、変化していく教育や大学教員の在り方などに関して理解を深める研修としたい。

## 令和4年度FD活動報告

部局名 都市デザイン学部

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

- ・令和3年度に実施した「卒業時調査(当時学部4年次対象)」および「学生満足度アンケート(当時学部1～3年次対象)」の分析を行い、英語教育改善の検討を開始するとともに、大学での教育内容について、ガイダンスの機会などを利用して丁寧に説明する取り組みを行うこととした。令和4年度より、カリキュラムの見直しを実施したところなので、次年度以降もアンケート結果の分析を続け、カリキュラムの見直しの効果を検証していく。
- ・3学科が日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育プログラムの審査を今年度受審し、材料は認定、地球と都市・交通は暫定認定となった。(正式発表は3月頃)

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

- ・学生生活に関するFD研修会を実施した(令和4年9月21日(水)13時)。八島 不二彦 学生支援課 学生生活相談員を研修会講師に迎え、「授業等で欠席が続いている学生のケア等について」と題して講演いただいた。
- ・3学科が日本技術者教育認定機構(JABEE)による教育プログラムの審査を今年度受審して、学生が理解しやすい学習・教育到達目標の設定と表記、シラバスの表記や評価方法などを明記することに努め、現時点で概ね認定の評価を得ている。  
学部学生と教職員を対象とした JABEE 講習会を学部として昨年度から実施している。今年度は2月8日に実施予定である。

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

- ・学生が心の不調を引き起こす背景要因に加え、学生支援のポイントについて理解を深めた。
- ・教員が、学生の視点で教育や指導方法を見直すことができ、PDCAサイクルを上手に活用できる仕組みを構築できた。

### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

- ・学生の不調を発見し、サポートするためには、教員個人での対応のみでは難しく、学生支援課や保護者と協力しながらすすめる必要があるため、教員、学生支援課、そして、保護者との連携体制をいかに構築するかが課題である。
- ・カリキュラム改善に対してのPDCAサイクルを、学生と教員、卒業生や卒業生の就職先等との連携をより強固にしていく必要がある。



## 令和4年度FD活動報告

部局名 教養教育院

### 【令和4年度の教育改善・教育評価に関する実施状況】

(これまで各部局で行ってきたFDを踏まえ、今年度に取り組んだ概要などを記載)

教養教育についての教育改善を図るために次の活動を行った。

- (1) FD研修会の実施(4回)
- (2) 教育改善プロジェクトの推進と報告会の実施
- (3) 昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析
- (4) 授業評価アンケートの部局独自項目の設問の改訂
- (5) 授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼
- (6) 不可の多い授業科目についての要因の調査

### 【取組事例】

(どのような取組みを行ったかを具体的に記載)

教育改善・教育評価に資するFDの実施状況を記載してもよい)

前項に挙げた6つのFD活動について、それぞれの具体的な内容を以下に示す。

#### (1) FD研修会の実施(4回)

今年度は4回のFD研修会を企画・実施した。第1-3回のFD研修会については報告書を作成し、その公開を行った。第4回についても年度内の報告書の作成と公開を予定している。第1-3回のFD研修会は「教養教育のさらなる充実を目指して」というシリーズ企画とし、他大学での教養教育の改革とその実際についての情報収集を行い、それを教員間で共有していくことを目的とした。第4回は「わかりやすい授業スライドの作り方」というテーマで、効果的な授業スライドの作成法について扱った。

それら各回の概要は、以下の様である。

##### ・第1回

金沢大学国際基幹教育院の澤田茂保教授を講師としてお招きし、「大学改革と教養(共通)教育-金沢大学の事例-」との演題で講演をして頂いた。金沢大学の教育改革実現の経緯、カリキュラムの概要、運営体制について、それを推進してきた当事者としての所見を交えた説明を受けた。

開催日時：令和4年7月28日(木)、参加人数：48名(内訳：教員39名、職員9名)

##### ・第2回

名古屋大学教養教育院長の戸田山和久教授を講師としてお招きし、「名古屋大学の全学教育科目

新カリキュラム」との演題で講演をして頂いた。名古屋大学の新教育プログラムや新教養教育運営組織について説明を受けた。

開催日時：令和4年9月28日（水）、参加人数：57名（内訳：教員52名、職員4名、学生1名）

・第3回

山形大学学士課程基盤教育機構の千代勝実教授をお招きし、「直接評価による卒業時の質保証～基盤力テストの到達点と今後の展望～」との演題で講演をして頂いた。「教員が教えたことを教える」から「大学として教える必要最小限」への方針転換について、また、学生自身がたてた学修目標の到達度を学士課程基盤教育機構の教員がメンタリングする「みずから学ぶ」や各年次の区切れ目に全学に対して実施する「基盤力テスト」についての説明を受けた。

開催日時：令和4年10月28日（水）、参加人数：49名（内訳：教員46名、職員3名）

・第4回

武山良三教養教育院長に「わかりやすい授業スライドの作り方」という演題で講演をして頂いた。デザインの観点からの効果的な授業スライドの作成についてご教授頂いた。また、実際の3つの授業で利用されている講義スライドを例示し、それについての改善点を示して頂いた。

開催日時：令和5年2月16日（水）、参加人数：64名（内訳：教員56名、職員8名）

## （2）教育改善プロジェクトの推進と報告会の実施

教養教育院の個人またはグループでの教育改善活動を推進するため、「教育改善プロジェクト」制度を設けている。実施者は「教育改善プロジェクト」を教育改善推進委員会に申請・登録し、教育改善推進委員会はその遂行を把握・後援することとしている。本年度は11件の教育改善プロジェクトが進行している。それらの教育改善プロジェクトの活動の進捗状況についての報告会を3月15日に開催予定である。

## （3）昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析

昨年度の授業評価アンケート結果とそれに対する授業担当教員からのフィードバックの内容について、教育改善推進委員会において調査・分析を行った。分析は教養教育科目の9つの系それぞれに対して行い、系ごとの特色の調査を行った。その調査・分析結果について、報告書として公表予定である。

## （4）授業評価アンケートの部局独自項目の設問の改訂

授業評価アンケートの全学共通項目が改訂されたことに合わせて、部局独自項目についても設問内容の変更を行った。講義科目、健康スポーツ実技、実験科目の種別に対して、それぞれ3-4項目の設問に整理し、ほぼすべての設問について全学版と同一の選択肢となるように質問方法を変更した。

## （5）学生による授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼

前期と後期それぞれの学期末に、教養教育科目についての学生への授業評価アンケートを実施した。また、昨年度後期と今年度前期の授業評価アンケートの集計結果を授業担当教員に示し、

そのアンケート結果を受けての自己分析と改善への取り組み、学生の自由記述へのフィードバックを求めた。

#### (6) 不可の多い授業科目についての要因の調査

前期の教養科目の成績分布を確認し、不可の割合が数十パーセントに達する科目が幾つかあることを把握した。そのように不可の割合が高くなる要因について探るため、不可の実情について調査した。

### 【得られた成果とその活用】

(FDを実施したことによりどのような成果があったか等を記載)

上記の6つのFD活動の成果について、それぞれ以下に示す。

#### (1) FD研修会(4回実施)

「教養教育のさらなる充実を目指して」というシリーズ企画として3回実施し、教養教育改革が先行している他大学での改革の実際についての情報を得た。それら3回のFD研修会を通して、「教養教育の役割」、「導入教育」、「学士過程を通じた教養」、「到達度評価方法」、「教養運営組織」等の事項について、他大学の状況を改めて整理できた。それにより、本学での教養教育改革の方向性の輪郭が見えてきたと考えられる。ここでは、「教員が何を教えられるか」ではなく、「教養教育として何を教えるべきか」が重要な観点となる。また、導入教育についてもより踏み込んだ取り組みが必要かもしれない。FD研修会を通して、教養教育改革への議論の活性化が図られたものと考えられる。

第4回では、効果的な授業スライドの作成法について扱った。デザインの知識を活用した材料の配置や余白の工夫等によって、スライドの見やすさが格段に向上することを学んだ。特にこの第4回については他部局からの参加者も多く、授業スライドの作成法についての関心の高さが伺えた。研修会後のアンケートにも「具体的で参考になった」等の感想が多く寄せられ、今後の授業で使用されるスライドの質の向上へ貢献できたものと考えられる。

#### (2) 教育改善プロジェクトの推進と報告会の実施

教養教育院の教員個人や教員グループによる教育改善活動の推進により、11件のプロジェクトの実施を促した。

#### (3) 昨年度の授業評価アンケート結果に関する分析

授業評価アンケート結果についての調査・分析により、教養教育の分野ごとの特色を整理し、授業満足度を中心とした指標の向上に関連する要因を探ることができた。ここでは、前年のコロナ禍による非対面を中心とした授業形態との差異にも留意し、特に健康スポーツ実技等で対面・非対面の影響が強く表れていることを把握した。この調査・分析で得られた知見は、今後のFD活動においても活用していく。

#### (4) 授業評価アンケートの部局独自項目の設問の改訂

部局独自項目について、全学共通項目と同様の設問形態に変更することができた。これにより、異なる質問項目についてのスコアの相関の解釈がこれまでよりも容易になるものと考えられる。

#### (5) 学生による授業評価アンケートの実施とその結果に対する各授業担当教員からのフィードバック改善報告の依頼

学生による授業評価アンケートを実施し、その結果に対する各授業担当教員からのフィードバックを求めることで、授業担当者の授業に対する自己分析と改善への取り組みのための機会を提供した。この授業アンケート結果と教員からのフィードバックについては、調査・分析を行い、今後のFD活動に活用していく。

#### (6) 不可の多い授業科目についての要因の調査

担当教員への調査により、履修放棄に近い学生の動向が不可の大きな要因となるケースが多いことが分かった。科目によっては特定の学部の学生にそのような動向が見られた。授業時間割や卒業要件等との関連を調査していく必要性が示唆される。

### 【今後の課題】

(今年度のFDの実施により明らかになった課題等を記載)

- 本年度のFD研修会を通して教養教育改革への議論の活性化が図られたものと考えられるが、その成果を具体化していくために、今後も教養教育改革に資するFD活動を行っていく必要がある。
- 教養教育の教育改善においては、教養教育院の専任教員のみならず、他部局の教員や非常勤講師も含めて担当教員の間での教養教育に取り組む意識の共有が必要となる。そのため、本年度のFD研修会は他部局教員や非常勤講師の参加に障壁が無いように企画・開催し、一定の参加者を獲得できた。今後もFD研修会をより一層開かれたものとして開催し、全学的なFD活動に貢献していきたい。
- 不可の多い授業科目では履修放棄に近い学生の動向が見られることが分かったが、その要因が授業時間割や卒業要件等に無いかを調査していく必要がある。

## 4. 全学におけるアンケート結果

令和3年度DP達成度調査・卒業時調査回答状況調

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率	R2年度回答率
人文学部	人文学科	1	176		71		40.3%		
人文学部	人文学科	2	178	536	37	122	20.8%	22.8%	42.0%
人文学部	人文学科	3	182		14		7.7%		
人文学部	人文学科	4	221	221	187	187	84.6%	84.6%	99.4%
人間発達科学部	発達教育学科	1	85		44		51.8%		
人間発達科学部	発達教育学科	2	84		13		15.5%		
人間発達科学部	発達教育学科	3	82	522	20	152	24.4%	29.1%	22.3%
人間発達科学部	人間環境システム学科	1	90		42		46.7%		
人間発達科学部	人間環境システム学科	2	91		18		19.8%		
人間発達科学部	人間環境システム学科	3	90		15		16.7%		
人間発達科学部	全学科	4	188	188	119	119	63.3%	63.3%	79.3%
経済学部(昼間主)	経済学科	1	125		23		18.4%		
経済学部(昼間主)	経済学科	2	119		26		21.8%		
経済学部(昼間主)	経済学科	3	135		15		11.1%		
経済学部(昼間主)	経営学科	1	101	941	51	224	50.5%	23.8%	19.8%
経済学部(昼間主)	経営学科	2	106		38		35.8%		
経済学部(昼間主)	経営学科	3	102		39		38.2%		
経済学部(昼間主)	経営法学科	1	86		11		12.8%		
経済学部(昼間主)	経営法学科	2	85		12		14.1%		
経済学部(昼間主)	経営法学科	3	82		9		11.0%		
経済学部(夜間主)	経済学科	1	9		4		44.4%		
経済学部(夜間主)	経済学科	2	12				0.0%		
経済学部(夜間主)	経済学科	3	10		1		10.0%		
経済学部(夜間主)	経営学科	1	10	90	1	11	10.0%	12.2%	15.1%
経済学部(夜間主)	経営学科	2	10		1		10.0%		
経済学部(夜間主)	経営学科	3	10		1		10.0%		
経済学部(夜間主)	経営法学科	1	10		1		10.0%		
経済学部(夜間主)	経営法学科	2	9		2		22.2%		
経済学部(夜間主)	経営法学科	3	10				0.0%		
経済学部	全学科	4	400	400	338	338	84.5%	84.5%	90.6%
理学部	数学科	1	52		24		46.2%		
理学部	数学科	2	49		18		36.7%		
理学部	数学科	3	64		21		32.8%		
理学部	物理学科	1	45		11		24.4%		
理学部	物理学科	2	42		8		19.0%		
理学部	物理学科	3	53		17		32.1%		
理学部	化学科	1	37	640	17	204	45.9%	31.9%	45.4%
理学部	化学科	2	37		3		8.1%		
理学部	化学科	3	47		7		14.9%		
理学部	生物学科	1	37		29		78.4%		
理学部	生物学科	2	34		11		32.4%		
理学部	生物学科	3	41		7		17.1%		
理学部	地球科学科	3	2				0.0%		
理学部	生物圏環境科学科	1	33		18		54.5%		
理学部	生物圏環境科学科	2	30		6		20.0%		
理学部	生物圏環境科学科	3	37		7		18.9%		
理学部	全学科	4	186	186	144	144	77.4%	77.4%	73.0%
医学部	医学科	1	114		73		64.0%		
医学部	医学科	2	105		38		36.2%		
医学部	医学科	3	110	561	69	181	62.7%	32.3%	38.3%
医学部	医学科	4	118		1		0.8%		
医学部	医学科	5	114				0.0%		
医学部	看護学科	1	86		79		91.9%		
医学部	看護学科	2	77	248	74	231	96.1%	93.1%	40.7%
医学部	看護学科	3	85		78		91.8%		
医学部	全学科	4+6	194	194	156	156	80.4%	80.4%	81.3%
薬学部	薬学科	1	60		56		93.3%		
薬学部	薬学科	2	54		54		100.0%		
薬学部	薬学科	3	64	298	63	289	98.4%	97.0%	80.2%
薬学部	薬学科	4	57		56		98.2%		
薬学部	薬学科	5	63		60		95.2%		
薬学部	創薬科学科	1	57		48		84.2%		
薬学部	創薬科学科	2	54	164	45	138	83.3%	84.1%	72.5%
薬学部	創薬科学科	3	53		45		84.9%		
薬学部	全学科	4+6	95	95	86	86	90.5%	90.5%	90.3%

令和3年度DP達成度調査・卒業時調査回答状況調

学部名	学科名	学年	学生数	学部学生数	回答数	学部回答数	回答率	学部回答率	R2年度回答率
工学部	電気電子システム工学科	2	2	1189			0.0%	19.8%	34.7%
工学部	電気電子システム工学科	3	4		1		25.0%		
工学部	知能情報工学科	3	5				0.0%		
工学部	機械知能システム工学科	3	1				0.0%		
工学部	生命工学科	2	2				0.0%		
工学部	生命工学科	3	2				0.0%		
工学部	環境応用化学科	2	1				0.0%		
工学部	環境応用化学科	3	4				0.0%		
工学部	材料機能工学科	2	1				0.0%		
工学部	材料機能工学科	3	1				0.0%		
工学部	工学科電気電子工学コース	1	86		24	236	27.9%		
工学部	工学科電気電子工学コース	2	103		24		23.3%		
工学部	工学科電気電子工学コース	3	90		22		24.4%		
工学部	工学科知能情報工学コース	1	84		34		40.5%		
工学部	工学科知能情報工学コース	2	77		12		15.6%		
工学部	工学科知能情報工学コース	3	93		9		9.7%		
工学部	工学科機械工学コース	1	94		16		17.0%		
工学部	工学科機械工学コース	2	108		16		14.8%		
工学部	工学科機械工学コース	3	96		7		7.3%		
工学部	工学科生命工学コース	1	56		11		19.6%		
工学部	工学科生命工学コース	2	55	8		14.5%			
工学部	工学科生命工学コース	3	51	9		17.6%			
工学部	工学科応用化学コース	1	54	14		25.9%			
工学部	工学科応用化学コース	2	77	10		13.0%			
工学部	工学科応用化学コース	3	42	19		45.2%			
工学部	全コース	4	360	360	302	302	83.9%	83.9%	82.0%
芸術文化学部	芸術文化学科	1	116	344	106		91.4%	63.1%	65.2%
芸術文化学部	芸術文化学科	2	111		66	217	59.5%		
芸術文化学部	芸術文化学科	3	117		45		38.5%		
芸術文化学部	芸術文化学科	4	120		100	100	83.3%		
都市デザイン学部	地球システム科学科	1	40	460	12		30.0%	10.9%	29.3%
都市デザイン学部	地球システム科学科	2	42		5		11.9%		
都市デザイン学部	地球システム科学科	3	43		7		16.3%		
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	1	42		10	50	23.8%		
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	2	42		3		7.1%		
都市デザイン学部	都市・交通デザイン学科	3	47		1		2.1%		
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	1	71		6		8.5%		
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	2	66		5		7.6%		
都市デザイン学部	材料デザイン工学科	3	67		1		1.5%		
都市デザイン学部	全学科	4	126		126	106	106		
全体	合計			7883		3593		45.6%	49.0%
	文系			3362		1470		43.7%	46.8%
	理系			4521		2123		47.0%	50.7%

※学生数(休学者を除く。), 回答数は, R3年度における学年を基に集計。

DP達成度調査	回答率	R3	R2
	合計	34.3%	37.9%
	文系	29.8%	31.4%
理系	37.3%	42.5%	

卒業時調査	回答率	R3	R2
	合計	81.4%	85.7%
	文系	80.1%	91.3%
理系	82.6%	80.7%	

94 ~107 ページは非公開です



## 5. 全部局FD活動一覽及び 参加状況

令和4年度FD参加状況(令和4年4月～令和5年3月)

令和5年3月31日現在

部局名等	参加率	FD参加者数 (人)	学部教育を担当する教員数	備考
人文学部	90.2%	46	51	(目標参加率達成)
教育学部	85.7%	42	49	(目標参加率達成)
経済学部	96.0%	48	50	(目標参加率達成)
理工学研究部(理学)	95.2%	59	62	(目標参加率達成)
理工学研究部(工学)	87.5%	77	88	(目標参加率達成)
理工学研究部(都市デザイン学)	89.8%	44	49	(目標参加率達成)
医学薬学研究部(医学)	92.3%	144	156	(目標参加率達成)
医学薬学研究部(薬学)	87.0%	47	54	(目標参加率達成)
芸術文化学部	94.9%	37	39	(目標参加率達成)
教養教育院	88.0%	22	25	(目標参加率達成)
大学院教職実践開発研究科	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
和漢医薬学総合研究所	100.0%	20	20	(目標参加率達成)
先進アルミニウム国際研究センター	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
附属病院	100.0%	109	109	(目標参加率達成)
教育・学生支援機構	100.0%	2	2	(目標参加率達成)
研究推進機構	100.0%	16	16	(目標参加率達成)
地域連携推進機構	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
国際機構	100.0%	5	5	(目標参加率達成)
総合情報基盤センター	100.0%	6	6	(目標参加率達成)
環境安全推進センター	100.0%	1	1	(目標参加率達成)
保健管理センター	100.0%	4	4	(目標参加率達成)
FD参加率	92.8%	738	795	

【調査方法】

今回の調査は、令和4年4月1日から令和5年3月末までのFD参加状況を各部局に照会したものである。

参加率の算出に当たり、対象は、学部等に所属する専任教員のうち、「学部教育を担当する専任教員」であり、FDの参加者数については、延べ人数ではなく、実人数を記載したものである。よって、1人の教員が複数回(全学、自学部、他学部、教養教育等)のFDに参加してもFD参加数は1カウントとしている。

昨年度の同調査では、全体のFD参加率は95.4%であった。

令和4年度 F D 活動実施状況一覧

(様式2)

※開催場所について、Microsoft Teams等を利用したオンライン開催の場合は、プルダウンより「オンライン開催」を選択ください。

会場を設けて対面型でのFDを行った場合は、開催場所（学部棟名、教室名等）を記入ください。

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	※開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	講師名（所属）	他部局参加可否	備考
1	第1回人文学部FD研修会	「最終年度教育への道すじ」	2022/9/5(月)	1H	人文学部棟第6講義室（講師はオンライン登壇）	人文学部	学部・研究科FD委員会	人文学部教員	42人	柳瀬善治准教授（広島大学）	不可	
2	第2回人文学部FD研修会	入試科目「情報」の追加により、今後、学生がどのような知識や能力を身に付けて大学に入学してくるのかといったこと等について、理解を深めるような内容での実施	2023/3/6(月)	1H	人文学部棟第6講義室	人文学部	学部・研究科FD委員会	人文学部教員	42人	成瀬 喜則 教授 (本学大学院教職実践開発研究科教授)	不可	
3	第1回経済学部FD研修会	コミュニケーションを苦手とする学生への理解について	2022/9/14(水)	1H	オンライン開催	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	44人	栗 林 睦 美 日下部 貴 史 (学生支援センター)	不可	
4	第2回経済学部FD研修会	PROGテストの解説会（1年次）	2022/10/12(水)	1H	オンライン開催	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	41人	谷川 雅之 (株式会社リアセック)	不可	
5	第3回経済学部FD研修会	PROGテストの解説会（3年次）	2022/12/14(水)	1H	オンライン開催	経済学部	経済学部FD委員会	経済学部教員	41人	谷川 雅之 (株式会社リアセック)	不可	
6	第1回教育学部FD研修会	富山県と石川県の教員採用の現状と大学教育学部に求めること	2022/9/22(木)	1H30M	対面（141講義室）/オンライン	教育学部	FD・カリキュラム委員会	教育学部教員、 教職大学院教員	38人	富山県教育委員会 (教職員課人事担当主幹 嶋谷 克司 氏) 石川県教育委員会 (教育次長 金子 俊一 氏)	不可	
7	第2回教育学部FD研修会	金沢大学学校教育学類 FD 研修会：「共同教員養成課程の授業実践報告と提言」	2023/3/9(木)	1H	教育学部141講義室	教育学部	FD・カリキュラム委員会	教育学部教員、 教職大学院教員	30人	齊一科目「教職と学校」令和4年度担当教員 (原田 克巳先生、上森 さくら先生、土屋 明広先生、平石 晃樹先生、森 慶恵先生) 学校教育学類長 山本 卓先生	不可	
8	第3回教育学部FD研修会	『金沢大学アカンサスポータルの使用方法・遠隔授業システムの使い方の説明』 『ハイブリッド型の講義における様々な情報機器の活用方法』	2023/3/20(月)	2H	教育学部141講義室	教育学部	FD・カリキュラム委員会	教育学部教員、 教職大学院教員	30人	宮 一志 教授 山口 範和 准教授	不可	
9	教職大学院FD研修会	子供や教師の学びや育ちからインクルーシブな教育を考える-対話をととしたキャリア発達の相互作用に着目して-	2023/3/4(土)	1H30M	教育学部341講義室	教育学部	教職実践開発研究科	本学教職員 非常勤講師 他大学教職員等	50人	菊池 一文 弘前大学大学院教育学研究科 教授 広島大学大学院人間科学研究科客員教授	可	
10	学生生活に関する理学部FD研修会	学生の相談内容の傾向と対応について	2022/7/13(水)	30M	オンライン開催	理学部	理学部学科長会議、 理学部学生生活委員会	理学部教員	52人	八島 不二彦 (学生支援課 学生生活相談員)	可	
11	理学部・理工学教育部(理学領域)合同FD研修会	発達障がいのある学生への支援について	2022/11/9(水)	1H	オンライン開催	理学部	理学部教務委員会・理工学教育部修士課程(理学領域)教育委員会	理学部教員	67人	教育・学生支援機構学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室 主任コーディネーター 日下部貴史氏	可	
12	第1回医学部医学科FD	JACME 受審に向けて富山大学医学部における教育の理解の共有	2022/5/18(水)	1H30M	オンライン開催	医学部医学科	医師キャリアパス創造センター	教職員、学生	44人	本学医学部医学科教員	可	

令和4年度 FD活動実施状況一覧

(様式2)

※開催場所について、Microsoft Teams等を利用したオンライン開催の場合は、プルダウンより「オンライン開催」を選択ください。

会場を設けて対面型でのFDを行った場合は、開催場所（学部棟名、教室名等）を記入ください。

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	※開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	講師名（所属）	他部局参加可否	備考
13	第2回医学部医学科FD	臨床実習におけるCC-EP0C導入について	2022/11/15(火)	1H30M	臨床講義室 I	医学部医学科	医師キャリアパス創造センター	教職員	45人	高村昭輝教授 (医師キャリアパス創造センター長)	不可	
14	第3回医学部医学科FD	CBT問題作成について	2023/2/27(月)	1H30M	臨床講義室 II	医学部医学科	医師キャリアパス創造センター	教職員	44人	高村昭輝 教授 (医師キャリアパス創造センター長) 近藤 諭 助教 (北越地域医療人養成センター)	不可	
15	令和4年度医学部看護学科FD	「分野別評価の審査」受審に向けて ～概要の理解～	2022/10/1～ 2022/10/31	2H	オンライン開催	医学部	看護学科	教員	29人	JABNE (一般財団法人 日本看護学教育評価機構) 作成動画	不可	
16	大学院総合医薬学研究科総合医薬学専攻看護科学プログラム及び医学薬学教育部看護学専攻FD	第一部 講演会： 大学院で特定行為を受けることの意味 第二部 座談会： 大学院に特定行為をおくことの意義	2022/12/27(火)	2H35M	附属病院 臨床講義室 1	総合医薬学研究科総合医薬学専攻看護科学プログラム・ 医学薬学教育部看護学専攻	総合医薬学研究科総合医薬学専攻看護科学プログラム・ 医学薬学教育部看護学専攻	大学院担当教員、NP コースシラバスに名前 が記載されている教員、 その他希望する者	18人	春山 早苗 教授 (自治医科大学 看護学部長)	不可	
17	第1回医療安全講習会	・医療安全、医薬品、医療機器 ・職場環境と病院機能	2022/4/26(火)	1H	日医工オーデトリウム	附属病院	医療安全管理部	全職員	1586人	長島久先生 他	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
18	第1回院内感染対策講習会	感染制御、抗菌薬適正使用	2022/6/29(水)	1H	日医工オーデトリウム	附属病院	感染制御部	全職員	1586人	山本善裕先生	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
19	第2回医療安全講習会	・医療界でのダブルチェック を再考し、効果的に活用しよう！	2022/7/15(金)	1H	大会議室 (中)	附属病院	医療安全管理部	全職員	1586人	松村由美先生 (京都大学)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
20	第3回医療安全講習会	・せん妄対策について	2022/10/7(金)	1H	大会議室 (中)	附属病院	医療安全管理部	全職員	1324人	北浦 祐一先生 (松下記念病院) 吉井 ひろ子 先生 (関西医科大学)	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
21	第2回院内感染対策講習会	感染制御と抗菌薬適正使用の考え方	2022/12/7(水)	1H	日医工オーデトリウム	附属病院	感染制御部	全職員	1586人	山本善裕先生	不可	当日受講、e-learning、DVD受講
22	第4回医療安全講習会	医療安全活動報告会	2023/3/23(木)	30M	臨床講義室 II	附属病院	医療安全管理部	全職員	66人	各部署スタッフ	不可	当日受講

令和4年度 F D活動実施状況一覧

(様式2)

※開催場所について、Microsoft Teams等を利用したオンライン開催の場合は、プルダウンより「オンライン開催」を選択ください。

会場を設けて対面型でのFDを行った場合は、開催場所（学部棟名、教室名等）を記入ください。

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	※開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	講師名（所属）	他部局参加可否	備考
23	令和4年度生命融合科学教育部FD研修会	生命融合科学教育部における博士課程教育の振り返りと継承	2022/12/6(火)	1H30M	オンライン開催	生命融合科学教育部	教務委員会	生命融合科学教育部教員	33人	篠原 寛明 教授（生体情報システム科学専攻） 森 寿 教授（認知・情動脳科学専攻） 豊岡 尚樹 教授（先端ナノ・バイオ科学専攻）	不可	
24	工学部FD研修会	令和3年度ザ・ティーチャーに選出された教員から、授業中に意識していることや工夫している点等について公演いただき、教員の授業内容の改善・向上に役立てる	2023年2月8日(水)	1H	オンライン開催	工学部	工学部FD委員会	教員	80人	伊藤 弘明 長谷川英之 白鳥 智美 遠田 浩司 (工学部)	可	
25	第1回芸術文化学部FD研修会	学生の精神的不調への気づきと対応	2022/6/22(水)	1H	芸術文化学部B212	芸術文化学部	芸術文化学部教育部会議	芸術文化学部教員	30人	富山大学保健管理センター 西山 志満子 講師	不可	
26	第2回芸術文化学部FD研修会	メンタルヘルスの基礎と支援のポイント	2023/2/17(金)	1H	芸術文化学部B212	芸術文化学部	芸術文化学部教育部会議	芸術文化学部教員	23人	富山県こどもこころの相談室 深澤 大地	不可	
27	学生生活に関するFD研修会	授業等で欠席が続いている学生のケア等について	2022/9/21(水)	30M	オンライン開催	都市デザイン学部	学生生活委員会	都市デザイン学部全教員	53人	八島不二彦(学生相談室)	不可	※対象者は、学系教員(1)及び特命助教(3)含む
28	JABEEの活用と技術制度説明会	技術士の役割等について	2023/2/8(水)	1H30M	対面開催 (総合教育研究棟(工学系)、多目的ホール)	都市デザイン学部	教務委員会	都市デザイン学部全教員、4年次学生	52人	公益財団法人日本技術士会	不可	※対象学生は3学科の4年次生
29	第1回教養教育院FD	本学教養教育の更なる充実に向け、改革を実施した金沢大学の先行事例を紹介する	2022/7/28(木)	1H	オンライン開催	教養教育院	教養教育院教育改善推進委員会	本学教職員及び非常勤講師	48人	澤田 茂保 (金沢大学国際基幹教育院長)	可	
30	第2回教養教育院FD	本学教養教育の更なる充実に向け、改革を実施した名古屋大学の先行事例を紹介する	2022/9/26(月)	1H20M	オンライン開催	教養教育院	教養教育院教育改善推進委員会	本学教職員及び非常勤講師	44人	戸田山 和久 (名古屋大学教養教育院長)	可	
31	第3回教養教育院FD	本学教養教育の更なる充実に向け、改革を実施した山形大学の先行事例を紹介する	2022/10/28(金)	1H20M	オンライン開催	教養教育院	教養教育院教育改善推進委員会	本学教職員及び非常勤講師	32人	千代 勝実 (山形大学学士課程基盤教育機構 教授)	可	
32	第4回教養教育院FD	実際の授業で使われている分野の異なるいくつかのスライドを例示し、それらの優れた点と改善点についてデザインの観点から解説する	2023/2/15(水)	1H	オンライン開催	教養教育院	教養教育院教育改善推進委員会	本学教職員及び非常勤講師	64人	武山 良三 (教養教育院長)	可	
33	英語による授業実施のための教員研修	英語による授業実施のスキル向上のため、3コースを実施。 ・講義とプレゼンテーション(導入) ・ゼミとディスカッショングループ ・少人数クラスのプランニングとマネジメント	2022/9/8(木) 2022/9/9(金) 2022/9/13(火)	各コース6H(90Mx4コマ)	オンライン開催	国際機構	国際機構	全学教員	3コース合わせて21人	British Council社	可	

令和4年度 FD活動実施状況一覧

(様式2)

※開催場所について、Microsoft Teams等を利用したオンライン開催の場合は、プルダウンより「オンライン開催」を選択ください。

会場を設けて対面型でのFDを行った場合は、開催場所（学部棟名、教室名等）を記入ください。

No.	研修会等名称	内容	開催日	所要時間	※開催場所	主催部局	主催者組織	対象者	参加者数	講師名（所属）	他部局参加可否	備考
34	令和4年度富山大学 安全保障輸出管理説明会	安全保障輸出管理に係る知識・学内手続の研修	2022/12/20(火)	2H	オンライン開催	国際機構	国際機構	教職員	76人	畑 良三（一般財団法人安全保障貿易情報センター） 望月 貴年（国際機構） 寺島 拓也（国際交流課）	可	
35	Moodle講習会	Moodleの利用に関してよくある質問の解説及び前バージョンとの違い等の解説を中心とした講習会	2023/3/24 2023/3/27	1H30M	総合情報基盤センター第4端末室	総合情報基盤センター	総合情報基盤センター	教職員	61人	遠山 和太（総合情報基盤センター）	可	
36	令和4年度薬学部・大学院薬学系 部会FD	班別討議及び全体討論	2022/8/19	5H	杉谷キャンパス講義実習棟 大講義室, 202, 203, 302, 303講義室	薬学部・大学院薬学系部 会	薬学部・大学院薬学系部会	薬学部及び和漢医薬学 総合研究所の教員	65人	なし	不可	附属病院薬剤部教員は薬学部教授会 構成員であるため例年参加可能。 （参加者数に含んでいる）
37	保健管理研究会FD「コロナ開け を見据えた学生・教職員のメンタル ヘルスとCOVID-19禍における多様 な取り組み」	保健管理の専門知識・技術の研修	2022/7/28（木） 2022/7/29（金）	7H	高志会館	保健管理センター	保健管理センター /全国大学保健管理協会東 海・北陸地方部会	東海北陸地区の保健業 務に従事する担当者	80人	榊原佐和子准教授（北海道大学） 石村郁夫准教授（東京成徳大学） 吉川弘明教授（金沢大学） 古川健治教授（北陸先端科学技術大学院大学） 齋藤滋学長 井ノ口馨教授（医学部） 石木学准教授（保健管理センター） 西村優紀美容員准教授	可	全国大学保健管理協会東海/北陸方部会 研究会のプログラムの一部として実施
38	第1回全学FD	自己省察を促し、主体的学習へ繋げる学修 ポートフォリオの導入	2022/6/1(水)	1H30M	オンライン開催	教育推進センター	教育推進センター	本学教職員 非常勤講師 学生	185人	成瀬 喜則 教授 （大学院教職実践開発研究科教授） 原野 克憲 氏 （富山大学教育学部附属小学校長）	可	
39	第2回全学FD	アフターコロナの大学教育のニューノーマ ル～教育の質の転換をめざして～	2022/9/29(木)	3H15M	学務部会議室、 共通教育棟A22番教室 （オンラインとのハイブ リッド開催）	教育推進センター	教育推進センター	本学教職員 非常勤講師 他大学教職員等	70人	鈴木 克明 教授 （熊本大学教授システム学研究センター・ 大学院教授システム学専攻）	可	

## 6. 各種資料

## 教育成果の評価についての基本方針

### 1. 趣旨と目的

認証評価等で学修成果の評価が求められている状況に対応し、富山大学においても学修成果の組織的な評価を行う。

その目的は、学修成果を明らかにして教育の質保証を行うとともに、評価に基づいた教育活動の水準の維持・向上を図ることである。

### 2. 評価の基準

学修成果は、どのような能力を身に付けたかによって評価することが求められている。そのため、同様の趣旨で制定された学位授与方針を評価基準とすることが適切である。

### 3. 評価の方法

以下の 4 つの方法によって評価を行う。

- 1) 在学中の自己評価
- 2) 卒業・修了時の自己評価及び客観的な資料による評価
- 3) 卒業・修了後数年を経た時期の自己評価
- 4) 就職先による評価

それぞれについての具体的な方法は、教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議が企画・実行し、教育・学生支援機構会議等に報告する。

### 4. 評価の実施体制

- ・各学部等，大学院において，自己評価を行い，課題を析出する。
- ・教育推進センター全学 F D ・教育評価専門会議において，各学部等，大学院の評価を取りまとめ，全学的な課題を析出する。
- ・教育推進センター会議において評価によって得られた課題等を提言する。



富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議内規

平成27年4月1日制定  
平成27年6月16日改正  
平成29年11月10日改正  
平成30年3月27日改正  
令和元年9月24日改正

(趣旨)

第1条 この内規は、富山大学教育・学生支援機構規則第20条第2項の規定に基づき、富山大学教育・学生支援機構教育推進センター会議（以下「センター会議」という。）に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 センター会議は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 教育の質保証に関する事。
- (2) 教育評価に関する事。
- (3) 全学的FDの企画立案、実施及び評価に関する事。
- (4) 教育環境の情報化に関する事。
- (5) 他機関との教育連携に関する事。
- (6) 学生の資格取得に関する事。
- (7) その他教育推進に関する事。

(組織)

第3条 センター会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) センター長が指名した教育・学生支援機構に主担当として配置される教員又は兼務配置される教員
- (4) 各学部教務委員長
- (5) 教養教育院から選出された教員 1人
- (6) 学務部長
- (7) 学務部学務課長
- (8) その他センター長が必要と認めた者

2 前項第3号、第5号及び第8号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第4条 センター長は、センター会議を招集し、その議長となる。

2 議長に事故があるとき、議長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 センター会議は、委員の過半数が出席しなければ開会できない。

2 議事は、出席委員の過半数をもって決する。ただし、可否同数のときは、議長がこれを決する。

(意見の聴取)

第6条 センター会議が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め意見を聴くことができる。

(専門会議)

第7条 センター会議は、センター会議の委員のうちの一部の者及びセンター長が必要と認める者をもって構成される専門会議を置く。

2 センター会議は、第2条に規定する審議事項を専門会議に付託し、専門会議の議決をもって、センター会議の議決とすることができる。

3 専門会議の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

(雑則)

第8条 この内規に定めるもののほか、センター会議に関し必要な事項は、センター会議が定める。

(事務)

第9条 センター会議の事務は、学務部学務課において処理する。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年6月16日から施行する。

附 則

この内規は、平成29年11月10日から施行する。

附 則

1 この内規は、平成30年4月1日から施行する。

2 この要項の施行後最初に選出される第3条第1項第5号の委員の任期は、第3条第2項の規定にかかわらず平成31年3月31日までとする。

附 則

この内規は、令和元年10月1日から施行する。

教育・学生支援機構教育推進センター全学FD・教育評価専門会議 委員名簿

令和4年4月1日

職 名 等		氏 名 等	備 考	任期
センター長が指名したセンター会議の委員（第1号イ委員）		たに い いちろう 谷 井 一 郎	(議長)	R3. 4. 1-R5. 3. 31
各学部FD担当委員長 (第1号ロ委員)	人文学部	お の なお こ 小 野 直 子		—
	教育学部	みや かずし 宮 一 志		—
	経済学部	かがわ たかし 香 川 崇		—
	理学部	からはら いちろう 唐 原 一 郎		—
	医学部	もり なが よし とも 森 永 芳 智		—
	薬学部	く め とし あき 久 米 利 明		—
	工学部	お ぐま のり やす 小 熊 規 泰		—
	芸術文化学部	むら た さとる 村 田 聡		—
	都市デザイン学部	まつ だ けん じ 松 田 健 二		—
教養教育院のFD担当 教員（第1号ハ委員）	教養教育院	教授	ひ 彦 つか やす まさ 彦 坂 泰 正	R3. 4. 1-R5. 3. 31
学務部学務課長（第1号ニ委員）		お だ せい き 織 田 世 起		—
その他センター長が必要と認 めた者(第1号ホ委員)	教育・学生支援企画室主担当配置教員	准教授	まつ もと かおる 松 本 馨	R4. 4. 1-R6. 3. 31

## 富山大学におけるFD活動報告書2022

発行／2023年3月

編集・発行／富山大学教育・学生支援機構教育推進センター  
富山市五福3190番地